以良都女

第十八號

明治二十一年十二月十五日發行

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第十八號目次

論説。女學の進歩。

小説。空行く月第十回(美妙齋作)

講義。用器畫稽古の仕方。

文藝美術。文殼。樂典初歩(上眞行氏)柳櫻都錦繪(立花屋ろをる作)

近刊批評。政黨美談淑女の操。三婦人雜誌の世評。

流行。松葉小紋‖唐松小紋‖獨鈷小紋‖唐草紋‖本字モノグラム‖香水瓶‖秋月の時計‖簪‖名刺‖春着一班。

寄書。竹子孃の傍許へ。はてな。

家政。禮儀の事。受取書を取る事。産室の心得。衣服の好。

雜纂。それハ昔これは今。

通信問答。鷹子さまへ‖リスリンの効用‖鼻血を止める法○ともゑ女史へ‖鐵漿の毒○石川しづ子さまへ‖にきびを去る法‖辭儀の仕方○陸中盛岡田舎娘さまへ‖顔の赤きを醫す法○美濃撫笄女史へ‖うつぎ花と卯の花‖齒磨に食盥を用ゆる事○松岡小夢女史へ‖蜜柑と葡萄の貯へ法‖女子家庭の敎育に付て○貴奴嬢へ‖額の生際を濃くそる法○阿部梅子令嬢へ‖痰を止める法‖聲をうるはしくする法○小蝶さまへ‖傳授所につきて○岡田令嬢へ‖紫銅ふ付て疑問れ答‖熨斗の濫觴

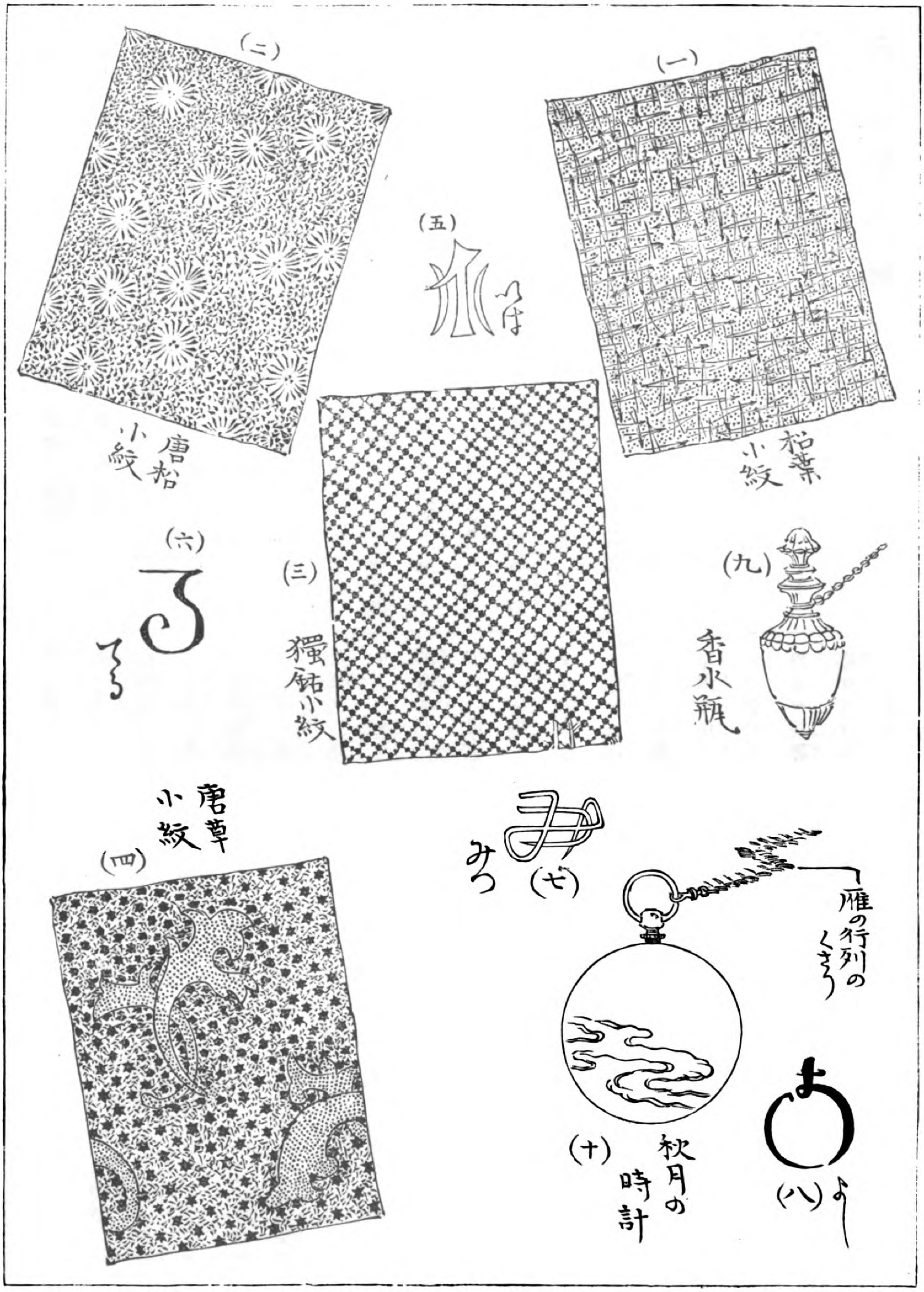
懸賞和歌文章

月報

いらつめ賣捌所

東京日本橋區新餃町 良明堂
同 同 蠣売町壹丁目 新文堂
同 神田區今川橋側 吉岡書店
同 同 佐柄木町 東海堂
同 同 淡路町壹丁目 殿々堂
同 同 錦町壹丁目 むさし屋
同 同 南神保町 江川
同 本郷元富士町 盛春堂
同 同 同 廣開堂
同 同 春木町二丁目 解明堂
大坂心齋橋備后町 岡島支店
堺熊野町 高山慶雲堂
備後福山霞町 明六舍

（流行は欄内を見よ）



Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第十八號

論説

女學ノ進歩

女子ノ教育カ數量上著シキ進歩ヲ爲シタルコトハ吾人共ニ許ス所ナリ其性質上何程ノ進歩ヲ爲シタルヤハサシモ其道ニ明カナル人ト雖圧遽ニ兎角ト答ヲ與フルニ躊躇スルナルベシ。學校ハ增セリ生徒モ殖エタリ。漢學者カ醫者カ但シハ最上流ノ女子ト生レタルモノナラデハ教育ト言ハル可キ教育ヲ受ケザリシハ往時一般ノ有樣ナリシガ今日ハ少シク心掛アルモノハ男ト無ク女トナク皆學校ニ入レテ相當ノ教育ヲ與フ可キ義務ヲ覺リタル世ノ中ナレバ數量上女學ノ進歩ハ目ヲ掩フモ見ザルヲ得ス耳ヲ塞クモ聞カザルヲ得ザル事實ナリ。往時ノ教育ヲ一言ニ評スルモノハ曰ク彼ハ只和漢書ノ讀誦詩歌ノ吟詠音樂ノ稽古等ニ過キズ之ヲ要スルニ當時ノ所謂教育ハ藝能ナリ女ノ嗜ナリ實用ノ學問ニ非ズト。余輩ハ竊カニ疑フ今日ノ女子教育ハ果シテ能ク此羈絆ヲ脱スルヲ得ルカ今日ノ女子教育ハ果シテ實用ノ教育ナルカ今日ノ女子教育モ亦藝能女ノ嗜ミヲ女子ニ授クルニ止マラザルカ。成程教育ノ科目ニハ理化學モアレバ裁縫モアリ家政學モアレバ料理ノ仕方モアルヘシ。然レ圧是等ノ科目ニ何程ノ効能アリヤハ容易ニ斷言シ難カルベシ今日ノ有樣ニテハ僅カニ理化學ノ一端ヲ覗フモ能ク日常事物ノ原由ヲ解シ之ヲ實際ニ應用スルヿハナカ／＼以テ覺束ナシ。裁縫ヤ料理ニ至テハ從來一家ニ於テ家母ガ自カラ其女ニ教フル所ニ比スレバ非常ノ徑庭アリテ殆ント實際ニ何ノ用ヲモ爲サヾルニ非ズヤ。是等ノ科目ハ隨分緊要ノ科目ナリ亦頗ル有効ノ科目ナレ圧只其未タ充分ナル尊敬ヲ受ケザルノ嫌アルハ余輩ノ遺憾千万ト思フ所ナリ。其外經濟學ナリ又ハ本邦法令ノ大要ナリ女子ノ日常心得置カ子バナラヌ事ハ蓋シ數フルニ遑アラザルベシ。今日女生徒ノ尤重キヲ歸スルモノハ英學ナリ其最モ喜フ所ノモノハ音樂等ナルベク世間ニ於テ殆ンド女子教育ト同視スルモノモ亦此二者ナルベシ。勿論英學ハ無要無益ノ贅物ナリトハ余輩決シテ主張セザレ圧只僅々タル年數ニ於テ學ビタル英學ニ何程大ナル効能アリヤト言ハヾ余輩頗ブル其答ニ苦ムナリ。直ニ歐米ノ書籍ニ付テ必要ノ科目ヲ學バンカ。頗ル覺束ナシ又覺束ナキノミナラス夫程ノ必要モ無カルベシ。思想ヲ練ントスルカ是亦隨分六ケ敷事ナリ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寧ロ漢學而已ナレバ或ハ智識ヲ練磨スルノ点に達し得可キモ漢和英學並ヒ修ムルガ爲所謂萬業ノ丁稚一業ノ主タル能ハザルモノニ陷ラントスルニハ非ザルカ。是ニ由テ見レハ今日世間ニ於テ最モ重キヲ歸スル科目ハ往時ノ敎育ニ於テ漢書ニ就テ其章ヲ尋子句ヲ摘スルモノト殆ント相異ナル所ナキガ如シ。漢學ガ變シテ英學トナリタレバトテ敎育ノ面目ヲ一洗シタリト言フ可カラズ。琴三味線ガ變シテ風琴「ピアノ」トナリタレバトテ修飾ノ學問ガ實用ノ學問トナリタリトハ言ヒ難シ。故ニ曰ク女子ノ敎育ハ數量上ニハ進歩セリ性質上ニハ未ダシト。非カ。余輩ハ詳カニ女學社會ノ實相ヲ知ルモノニ非サレバ事實ニ於テ誤ル所無キヲ保セズいらつめ記者乞フ幸ニ叱正セヨ

小說

空行く月

第十回

美妙齋主人

日本に居るといふ婦人、日本に居て行末ハ弓之助の妻ともならうといふ阿輝、いづれ捨てた程のものでもあるまいと陰ながら價値をつければ付けるほど美麗の心は晝も夜です。曾て害をも加へなかッた蝴蝶、それが不公平にも雀に狙はれるやうに爲ッて來ました。　前夜弓之助の意中を聞決めてからといふものはその事のみ美麗の胸につかへて、いたづらに阿輝のことを穴探問ふてはいよ〳〵物思に枝を添へて居ます。

どうしても邪魔です、日本に居る阿輝が。　死ねばいゝと思ふばかりです。　けれど互に千里をかけはなれた身、手の出しやうもありません。　手を出さずに居れば弓之助ハやがて歸國して仕舞ッて……發矢無念……さぞその阿輝が……

我を冷笑ふやうな庭木の風、われを誹るやうな東山の雲。東山……その末は日本……日本、阿輝の居る日本。　心で之をむかへて心で之を悔ゆる熱心の時のいぢらしさ、冷笑ふかと思へば庭木の風も阿輝の聲らしく、また誹るかと思へば雲も阿輝の顏らしいです。

聞く。答へる。答へる男の口氣ハ阿輝をよく思ッて居る風情もしも人の心が我身のやうに自由になるものならば……とハ考へながらさて我身で我身を制することは出來ませんから勝手なものでそ。　一日と過ぎ、二日と暮らせば、さすがまた弓之助の方でも何處やらきまりが惡く、ことに歸朝ハ是非とも爲なくてはならぬ身分、そろ〳〵辭し去らうかとする樣子も見えて來なくハ有りません。　あゝら、この戀、やぶ

れますか知らん。

が、一策を按じ出しました。それは外の事でも無く阿輝からの偽手紙……愛想づかしの……を拵らへてそれを弓之助に受取らせ、阿輝との間の愛情を奪ッて仕舞はうといふ事です。

しかし、また考直せば阿輝からの偽手紙をこしらへる、その偽の基、すなはち阿輝の手跡といふものハ分解りません、また假令わかッたとした處が、第一、日本から經て來る消印が封袋につく譯がありませんから折角の名案ながらこの手段も廢されて仕舞ひました。

けれど、また最一ッ、別の思案がつきました。思案、實に一寸巧な思案です。その思案は何かと云ふと、今度のハ前と反對で弓之助からの愛想づかしの偽手紙をこしらへて阿輝に與へやうといふことです。

「もし左樣すれば日本からも矢張り愛想づかしの手紙が來るに違無い。愛想づかし…いや、今まで弓之助の心があれほど強く阿輝の方にかたむいて居るほどだから…よほど此方から激しい愛想づかしを言ッてやらなければ對手でも直に怒るやうに爲るまい。はげしい愛想づかし…それをこしらへるのも何も譯は無い。むゝ旨い、これが一番だらう。弓之助の偽手紙……それは作り易い」。

天晴手段を思付きましたが、さらに又考直して見れば、その偽手紙を書く人がありません。之にも流石當惑しました「折角考付いた名策を」打捨てるのは惜しいに違ありませんが、しかしまた行ふ手段も有りません。此處に至ッて途も究まりました。たゞ思案にしづむばかりです。けれどまた惡い智慧の出るときにハ出るもので、更にまた之よりも一層巧な手段がその後四五日過ぎて浮かんで來ました。

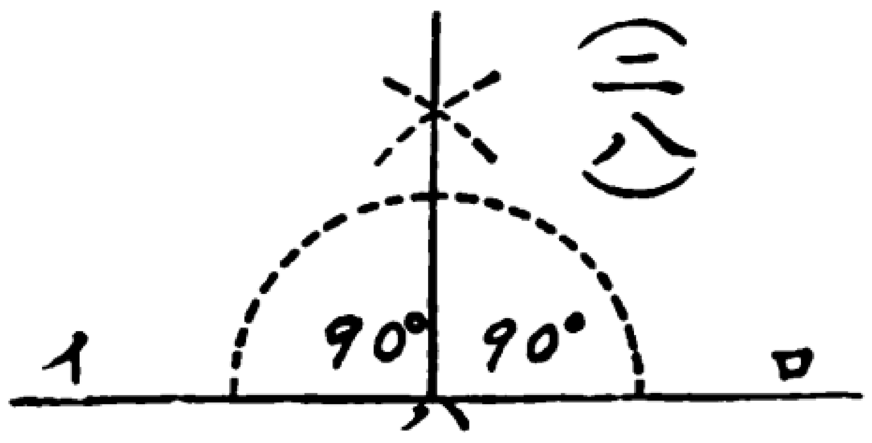
附言。人並にかれこれ主人も歳末が急がしく、それため御申譯だけに小説も大層短うございました。いづれ來年となりましたら十分御埋合をいたし升。

教員「だれが婦人の身で三韓を征伐しました？　え、何といふ人が？」併しながら生徒ハ忘れて答へません、再三教員が尋ねても對へませんから教員も竟にハぢれこみ、聲に力を入れて「さア」誰が三韓を征伐しました？」と尋ねると生徒の中の一人の女の子は眼に涙を含ませて「妾ぢやアありませんよウ」。

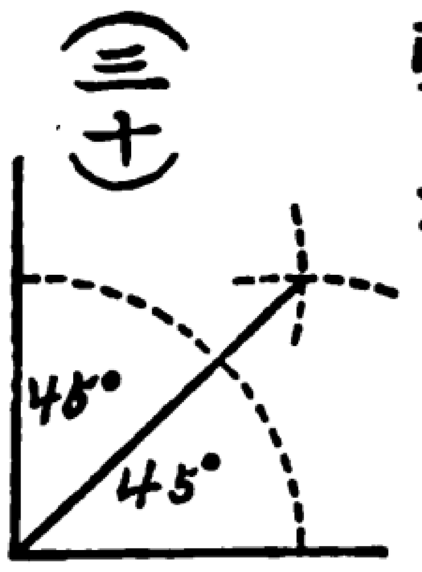
講義

用器畫稽古の仕方

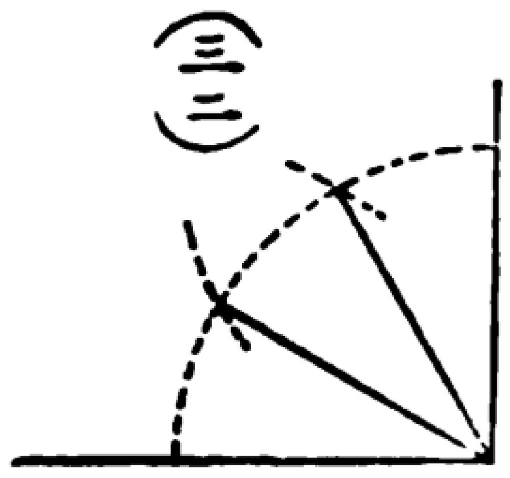
いらつめ第十四號の答

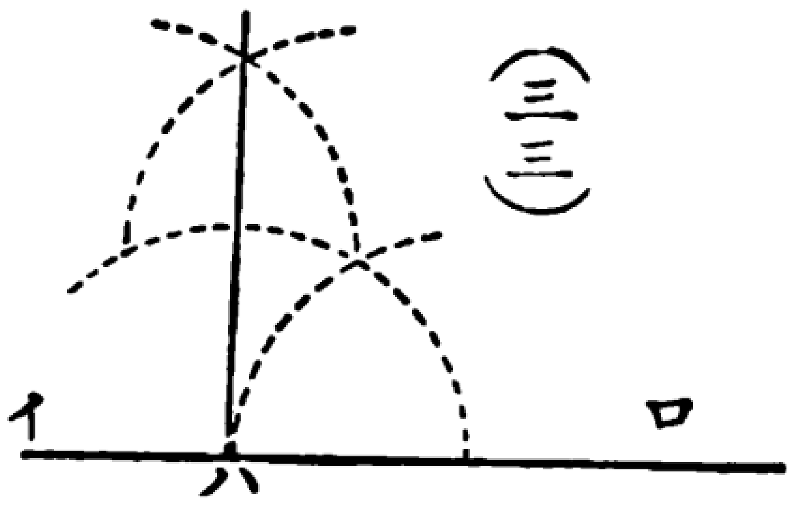


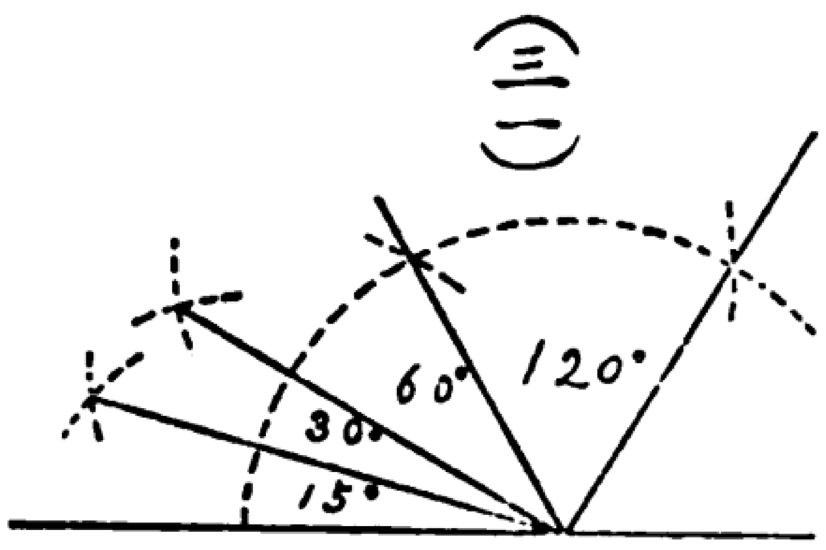
(二十八)(イ)(ロ)ハ定線にして(ハ)ハ定點なり(ハ)を圓心として半圓形を書き之を二等分する線を引くなり

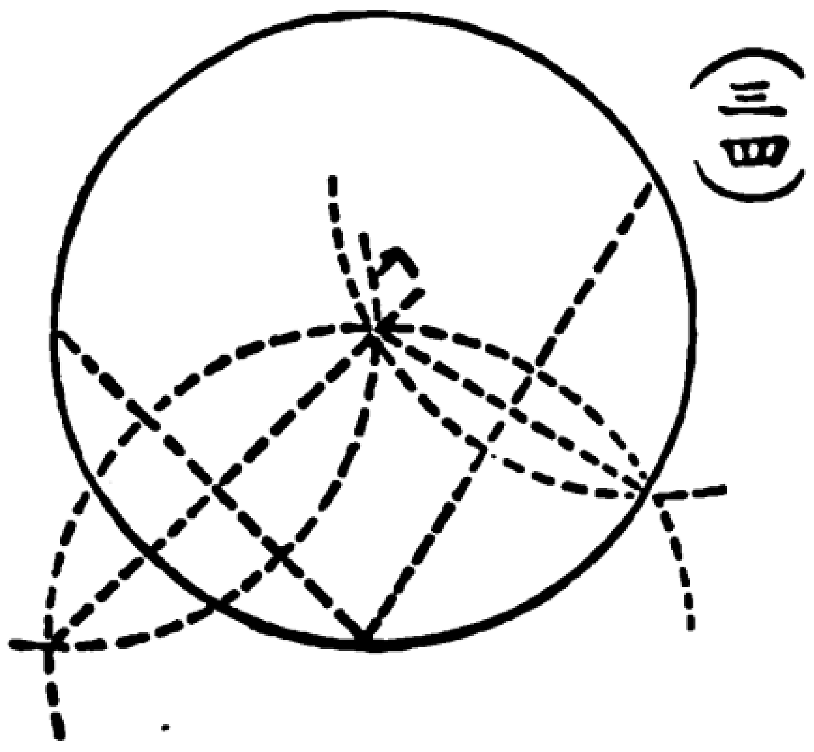


(三十)先づ直角を作りて之を二等分する一線を引くなり

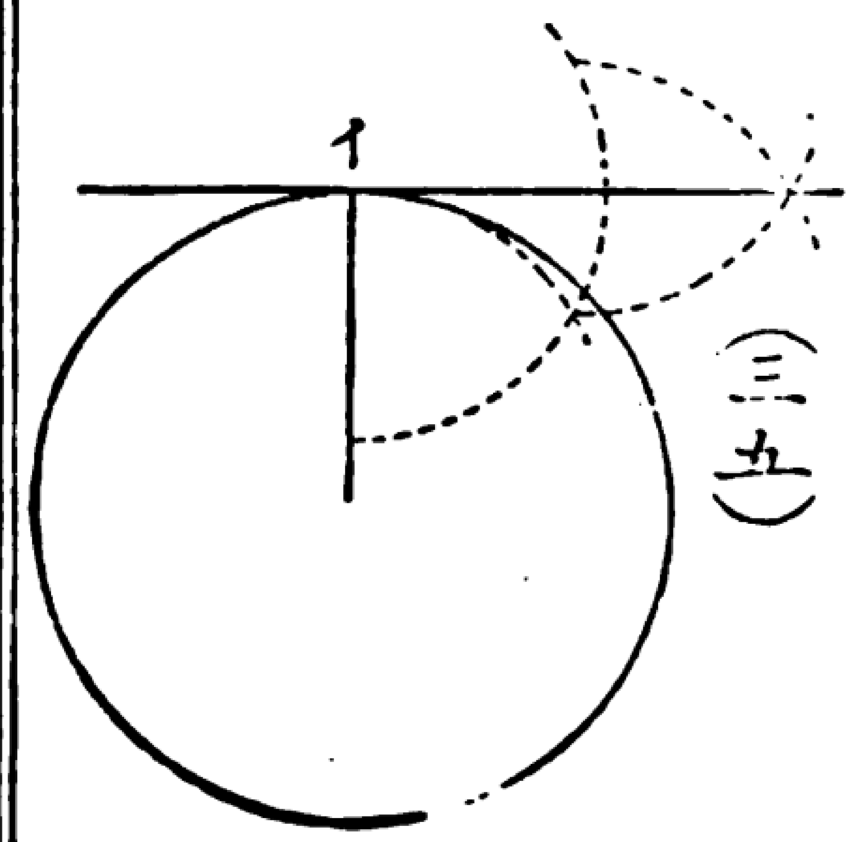








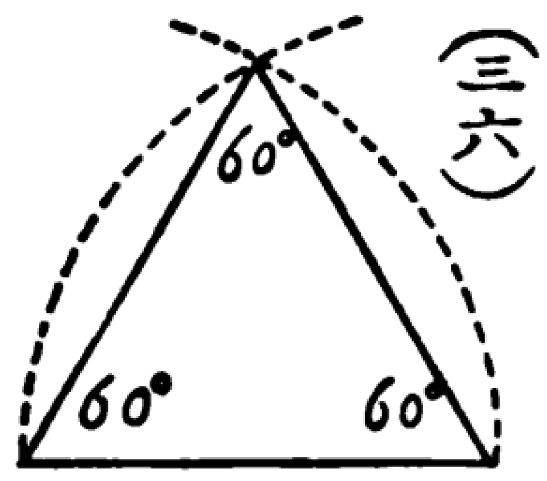
(三十四)(ハ)ハ即ち圓心なり

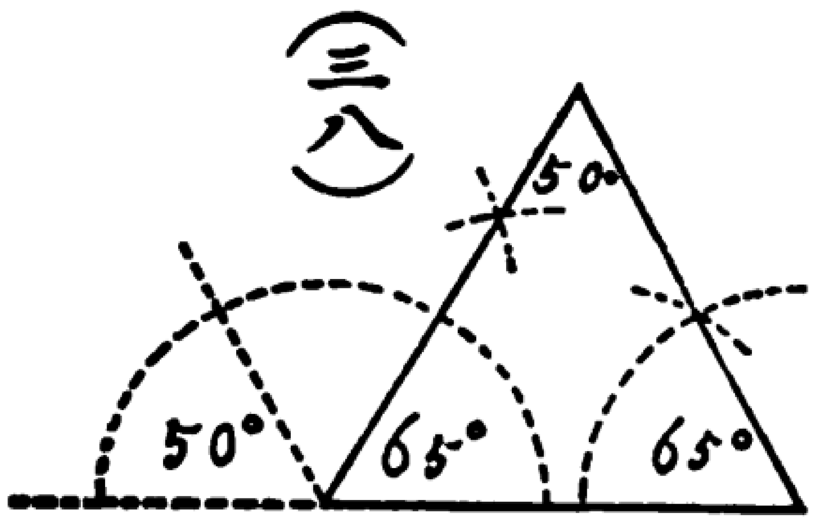


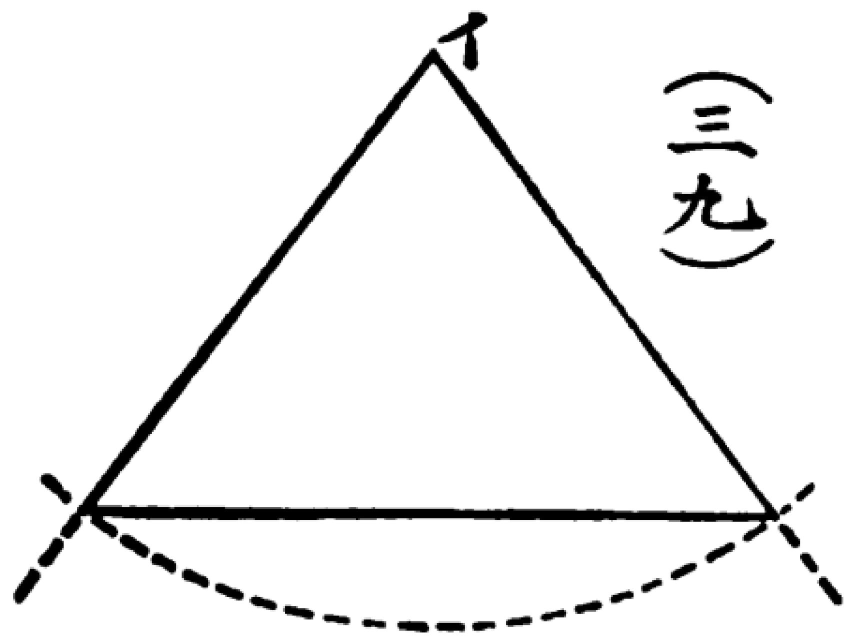
(三十五)(イ)を定點とす先づ圓心を求めて(イ)點ト連接せる半徑を引き次に其半徑の一端即ち(イ)に直線を引くなり

第七回角度の脱明に540ハ450 200ハ150の誤なり

いらつめ第十五號の答





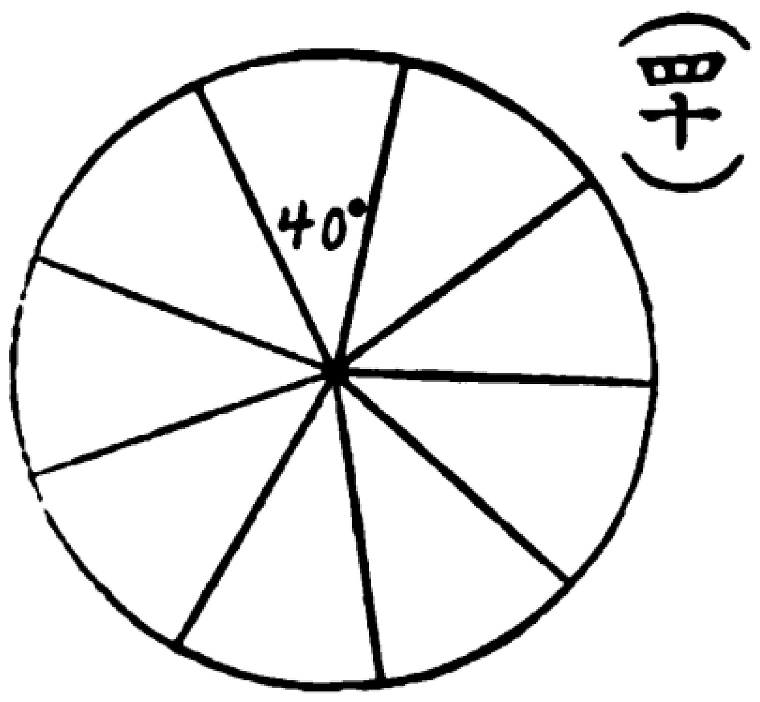


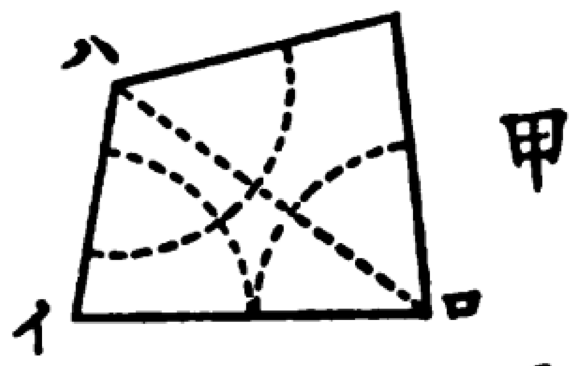
(三十六)角度の和は百八十度なり

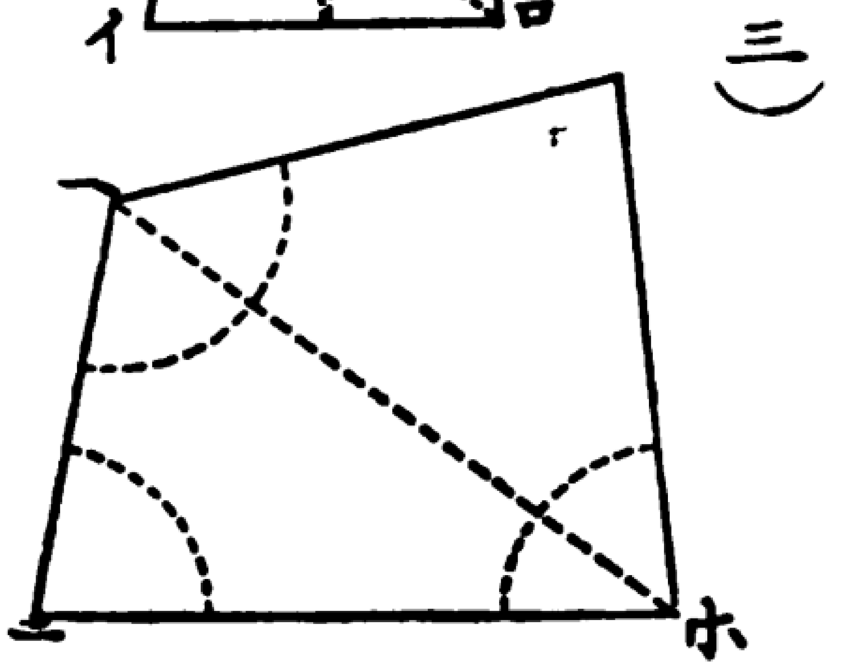
(三十七)何れも百八十度を有す

(三十八)(イ)(ロ)ハ底とす

(三十九)任意の角を書き其(イ)點を圓心として一個の弧を書きて角邊を切るなり







(四十)先づ圓心を求めて半徑を引き次に三百六十度九分の一即ち四十度の角を作るなり

(四十一)前法によりて圓周を九等分し其二點ツヽ連接する直

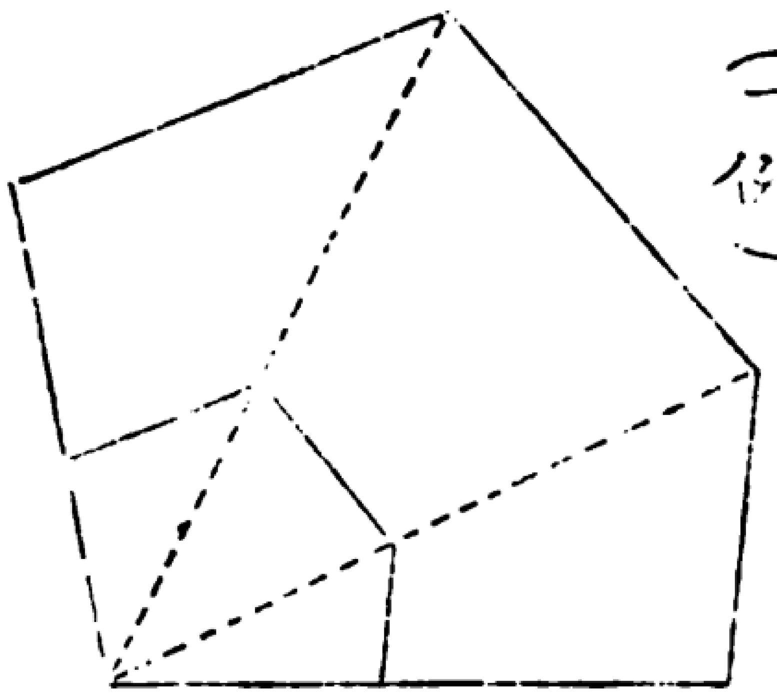
線を引くなり

　いらつめ第十六號の答

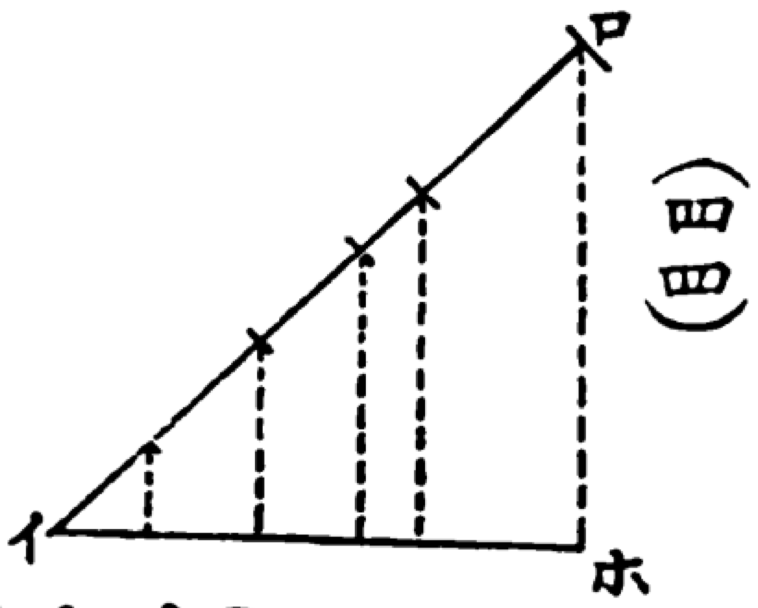
(四十二)先づ定線を引き其兩端上へ甲の（イ）及び（ハ）角を移して其兩角邊を引伸ぞなり

(四十三)甲を適宜に畫きたる四角形とそ先づ（イ）（ロ）に當る（ニ）（ホ）線を引き（イ）角を（ニ）に移し（ロ）角を（ホ）ふ移して其角邊を引長せば（ハ）點を得る而して（ハ）角を（ヘ）に移ぞなり

（一例）



（四四）



第四圖の解説中正法形ハ正法形内の誤

　いらつめ第十七號の答

(四十四)（イ）（ロ）線端に（ハ）（ニ）を引くと（イ）（ホ）の如くなして（ロ）（ホ）を連接し而まて（ロ）（ホ）に平行する線を（イ）（ロ）線上の各分點より引けば求むる如く（イ）（ホ）を分割するなり

(四十五)ハ別ふ答式を擧げません　(完)

文藝美術

文殼

おもし樓藝仙

「ヤア、善い物を拾つた。」

「あんざあんだ、何を拾つた。」

「手紙ざ、ハア其れも新しい手紙ざ。」

「新しいッテ古いッテ人の手紙を何にする。」

「わしイ長らく國へ手紙を遣ンないから。」

とれ注意深き權助の發明なり。手紙の反故よいろはの拾ひ讀みをしてランプの掃除ぢ隙取るハ學識あるお三の一失なり。

「つれづれと降り暮らして蕭然なる宵の雨ふ……近き御厨子なる色色の紙なる文どもを引き出でて中將理なく床しがれば……足下ふてそ多く集へ給ふらめ、そまし見ばや……」など雲の上人も爭ひ給へり(帚木)

げにや、見たき物は怖い物、いらつめ、芝居の替り目、其れにも增して人の文なり。こは雲の上人も泥の下人も上下の差別あき人情なり。かるがゆゑふおかるハ二階で延べ鏡をし、九太夫は椽の下で浮き身をやつせり。

藝仙先年暫く函館ふうろつきし頃、須磨の巻か何ぞを氣取て京地の友人の許へのべつに手紙を送りしが、此の頃其の人より借りたる本の間ふ挾まりたる二三通の文殼を見れば「珍しや昔ながらの山の井ハ沈める影」の朽ちもせぞ、次ぎに記せる手紙どもにて有りけり。己れが珍しとする所を人にも見せんとするハ「イエスキリスト」の喜び給ふ所にして誠よ結構あ

る事ながら、自分の文殻を披露するもチト可笑しな物。去かし「うたわなるべき」筋の文ならねば著るべき心配もなし。人の文を批評せんよりは自分の物を賞翫した方が差支なくてよし。

扨看客の御承知の如く、藝仙はお古い聲色が御株にて當時流行の言文一致乃至は新体詩杯の中へは丁度清元の移りに園八の珍しきが如く大に看客の御意に入るべしと信ずる處に編輯長杯は却て心配して「貴君の物は餘り面白過ぎて困るから、御老人にはまづまづ御休息」杯と親切に勞はり呉れると雖、藝仙中中勉强家にて推して今度も罷り出るに付ては編輯長は特に「無藝無術」の欄を設けんと云ひしかど、小生固より温良恭儉讓のをのこなれは達て之を辭退し、矢張り並々の文藝美術の欄に出でたる譯なれば看客諸君之を諒せられよ。

扨又(コレサ前口上もモウよし給へ)然らは文殻を御覽に入れ申さん

○其の一

(上略)けふは陰暦の五月五日なりとて舊弊なる軒に菖蒲葺くを見るにも堀切の花やいかならんと

戀しさを忍ぶの軒の忍ぶれど今日はあやめのねをぞ掛けつるいふ甲斐なしや(下略)

○其　二

(上畧)さりともと思ひし港の舷燈もやうやう暗う成りぬ。「秋は色増そ花頂山、あれ見やしやんせ海晏寺」も思へば遠く隔たりぬるかな。まして馴れにし庭の梢はかけじとすれどあやにくに

身に添へし時雨ばかりをかでとにて思はぬ袖の紅葉をぞ見る(下略)

○其の三

此の手紙を御覽に入るゝ前に申し上げ置くことと一二なり。まづ海松とは土佐日記にも歌に讀まれたる物にて看客の知り給ふ所なるが、其の質を委しく云へば一寸、枝珊瑚の如き物にして其の色は美くしけれど空氣に久しく晒さるれば色さめて白くなるなり。次に申すは、此の頃藝仙は愚にも(今も賢きことと無論なり)身に負はぬ錦の袖を羨みて、或る年の始の子の日に能宣朝臣の歌(松なくば引く人今日は有りなまし袖の緑ぞ甲斐無かりける)を思ひよせて

「立ち招く尾花が袖に年暮れて緑ぶにせぬ今日は何なり。」と友人に愚痴をこぼしさる其の年が即函館行

の年にして彼の地に年を超したり、翌くれば一月一日正に子日に當りければ彼の友人に遣はせる年始狀の中に色さめたる海松を包みて（ナール程謂はれを聞けば有り難くもなんぞもあし。）

（上略）こぞの子の日と同じ袖にてなん、立ちまふべくも有らざりしを今日は人並みに新正を懸題に賀し奉り

君が爲め引くや根もろの海松の赤き心は神し知らさん

此の色のやうやうあわせ行くを見るにも「許レ國漸疎悲ニ壯志一、讀レ書多忌愧ニ新功一」と陸務觀が云ひけんあぞ（下略）

○其の四

此の年の春友人の無汰沙を責めて（是れは嚴しい）

契りきや都の花の散り散らぞ人づてにぶに知らで經んとれ

と申し遣はしけるは彼れも口の減らぬ男にて

海松の赤き心のねを絶えて花の上のみ何か云ふらん

と返事せしこそ憎らしけれも猶彼の海松を記臆しゝりけりと嬉しかりき。

○其の五

彼の地に島の武藏野と云ふ家を下宿にすとて京なる人の許に

名にめでて猶ぞ尋ぬる武藏野に結ぶも草の枕あれども

（文言は略す）

樂典初步

夢の屋かをる

音階はたゞ（ハ）調長音階の一種を以て音樂上の要需を充分する譯には參りませんから（ニ）（ホ）（ヘ）（ト）（イ）（ロ）の諸音ゟら始めて數多の音階を搆成し種々異性質の音階を完備せねばありませんソコデ皆樣疾く御存の通り（ハ）を基音として音階を搆成しますと其八音は

ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　イ　ロ　ハ
一　一　半　一　一　一　半

となりて其中に一の嬰變者をも交へず悉皆自然音のみで立派な長音階が出來ますけれどももし此音階中の他の音を取りて其上に音階を作りますと其音階は決して長音階普通の形式たる二全音一半音三全音一半音とはなりませんで各種各樣不規則千萬な音階となります例へば（ニ）を基音として音階を作れば其八音は

ニ　ホ　ヘ　ト　イ　ロ　ハ　ニ
　＼　½　＼　＼　＼　½　＼

とあり(ホ)を基音として作れハ其八音ハ

ホ　ヘ　　　イ　ロ　ハ　ニ　ホ
　½　＼　＼　＼　½　＼　＼

となりていづれも適當な長音階とはありません　それは其筈ですよ無暗とイロハの順に八音を並へるとてそれで適當な音階の出來様わけはありません　苟も適當な音階を得んとあらば是非「トランスポジション」即ち移調法に據らねばなりません　移調法にて音階を移せばどの音からでも立派な長音階が成り立ちますシテ彼の不規則な片輪音階ハ二度とふたゝび成り立つ氣遣がありませんから是より皆様に移調法をお話致さうと存します

移調法には嬰種と變種との二つありますが嬰變を論せず必す(ハ)調長音階を基礎とし模範とし且つ左の規則を確守せねばなりません

第一則　嬰種移調法

(1)嬰種移調ハ必ず基礎音階の上行第五音に始め此音を主調音として新音階を構成すべし

(2)新音階の導音(即ち第五音)は必す自然音より半音高めて其音に一個の嬰號(#)を附記すべし

第二則　變種移調法

(1)變種移調ハ必ず基礎音階の下行第五音に始め該音を主調音として新音階を構成すべし

(2)新音階の第四音ハ必ず自然音より半音低めて其音に一個の變號(b)を附記すべし

先づ第一則なる嬰種移調より試みて見ましやう

今基礎音階の第一音たる(ハ)より上行第五音を求むれば即ち(ト)を得ます　此(ト)音こそ新音階の主調音ですから之に基きて音階を作れば其八音は

ト　イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト
　＼　＼　½　＼　＼　½　＼

となりますシテ之を模範音階に照すに第一音より第六音まではハ全く同形なれども第七音と第八音との間に全音現出の欠點あり爰に規則第二項に從つて其第七音を自然音より半音高めて(ホ)と(ト)の中間音なる#(ヘ)を取りて新音階の導音を完備せねばなりません即ち次の通りに

ト　イ　ロ　ハ　ニ　ホ　#ヘ　ト
　＼　＼　½　＼　＼　＼　½

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

只今出來たのは即ち(ト)調音階です。

嬰種移調は只今試みた通りで外に仕方もありません實に簡單極つたものです　最早クドクド敷試むるにも及びませんが今一つ試みて見ましやう

今度も(ト)より上行第五音を求むれば即ち(ニ)を得ます此(ニ)を主調音として音階を作れは其八音は即ち

ニ　ホ　♯ヘ　ト　イ　ロ　ハ　ニ
／　／　½　／　／　½

となりますシテ其不都合は矢張第七第八の間でそれから第七音に一個の新嬰を加へて此音階の導音を完成せねばなりませんされば(ニ)調に於ては嬰(ヘ)の外に更に嬰(ハ)なる人工音が加はります

ニ　ホ　♯ヘ　ト　イ　ロ　ハ　ニ
／　／　½　／　／　／　½

此他は皆樣にお任せ申しますから春永の時節に一ト通り移調して御覽なさい但移調の順序は次に記した通りです又(ト)調以下は移調するごとに一個の新嬰を增しますから最後の嬰(ハ)調に至りては音階の八音は悉皆嬰音に變じます

嬰種移調の順序

基調	1	2	3	4	5	6	7
(ハ)	(ト)	(ニ)	(イ)	(ホ)	(ロ)	(♯ヘ)	(♯ハ)

次に變種移調を一二試みて見ましやう

今基礎音階の第一音より下行第五音を求むれは即ち(ヘ)を得ます此(ヘ)は即ち新音階の主調音ですから之に基きて音階を作れば其八音は即ち

ヘ　ト　イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ
／　／　／　½　／　／　½

となります之を摸範音階に照せば矢張一個の不都合があります第三第四の間は長音階の定形に於て是非半音たるべきに今得たるものは全音なれば規則第二項に從て其第四音を自然より半音低め其音に一個の變號b(へんがう)を附して第三第四の間に半音を完成すれば即ち完全な(ヘ)調音階が成り立ちます

ヘ　ト　イ　♭ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ
／　／　½　／　／　／　½

次に(ヘ)の音階より下行第七音を求むれば即ち變(ロ)を得ます變(ロ)を基音として音階を作れば其八音は

♭ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　イ　♭ロ
／　／　／　½　／　／　½

となりますシテ其不都合は矢張前同樣第三第四の間でそから(ホ)を半音低めて(♭ホ)となせば即ち立派な變(ロ)の音階が成り立ちます

♭ロ　ハ　ニ　♭ホ　ヘ　ト　イ　♭ロ
1　1　1/2　1　1　1　1/2

此他の移調ハ聖種の通り一切お任せ申します但移調の順序は次の通りですシテ(ヘ)調以下ハ調ごとに一個の新變を増しますから變(ハ)の音階では其八音は悉皆變となります

變種移調の順序

其調	1	2	3	4	5	6	7
ハ	(ヘ)	(♭ロ)	(♭ホ)	(♭イ)	(♭ニ)	(♭ト)	(♭ハ)

柳櫻都錦繪

立花家らそる作

本舞臺三間の平舞臺上下藪疊所々に杉の立木後一面の黒幕より同じく杉の釣枝丸物の石燈籠を位置よく並べ此中眞中に一ツにかすかに火を點し誂へなどにて御廟前通り夜の景物淒き道具風の音雨車にて道具おさまるト向より以前の淸子裾を端折り蝙蝠傘をさし考へながら出で來り花道にて

(淸)今宵に迫る金子の必要若し調達のならぬ時ハ花垣樣ハ大望の成就の前に不義の汚名せめて兄さんが此地にお出あれば又相談も有るけれど長崎表へ出張中支那水兵との事件よりお悼しや禁錮のお所刑それ故今ハ何處をどうとも當もなしさりトて金子の出來ぬ時には先太郎樣の一大事アーこりやどーしたら宜かろうかト色々氣の揉めると宜しくトヽつまづいて鼻緒を切る(淸)あれハ去たり幸ひ彼の石燈籠の火影にてト石燈籠の側により懐中より紙を出し紙撚によッて居る向より以前の正作番傘をさし松源の提灯を持ち出來り(正)歸りに松源に寄れとのこと故寄て見たれば御神さんの言には小六さんが逃げ出して行衛が知れ子ー故旦那樣ハ三八さんを連れて方々を車で尋ねてお出なさるから根岸へ歸て待て居ろとの事故提灯を貰て出て來たが持ッたことのない大金を持てゐる故心配でなら子ーたんト降ら子ー内早く行うト舞臺に來り石燈籠の陰の淸子を見つけ提灯をさしつけブル〳〵トなり(正)そ……そこに居るのは(淸)ハイ妾は根岸に歸る者でムい升が折惡しく鼻緒を切り難澁致して居り升ル(正)左樣ですか夫れで己れも安堵いたト淸子の顏を見て(正)孃樣ハ先キ上野の三宜亭にお出なさりませんか(淸)ホンニ先のお方樣(正)孃さん…ふつた儘で

今時分こゝらを通るには深い子細の有る事たらなら若い時に
は二度ハ無いなど卜情事なんぞしたら御兩親に濟子ーヨ…此
節の孃さんハ御歷々の方でもそんな事にはスパシッコイ柄（
清）ホヽヽヽ決て其樣な事ではムいません先き上野て亂暴
人に出逢ひ其の掛り合ひで黑門町の分署迄てまいり升た故そ
れで如斯に晩くなり升タ（正）それにしても年頃の娘衆が夜道
をするは危ねー事だ早く鼻緖を立てゝ御歸りなさい幸い袂に
麻か有るから卜捨臺詞にて袂から麻を出てやる（清）御信切に
難有存じ升卜清は鼻緖を立て居ル正ハ提灯を見せてやる（清）
モシどこかの御使れお歸りでムり升か（正）ハイ私ヤ主人の使
で出店の番頭さん柄金を受け取て來やした（清）ソンナラお金
を（正）丁度百五十兩程受け取て來やした（清）アノ百五十圓卜
おッと思入れ此時鼻緖を立てしまう正ハ飛だ事を言たと云ふ
思入しにて（正）モー出來升たかドレ行きまやう卜上手に行き
ろゝる此時清子ハ金の欲しき思入レ色々あり雨車漸々烈しく
なる（清）一寸待て下さいまし正はこれにて立留り（正）何か御
用でム了升すか（清）ハイチト折入てお頼みがムイ升（正）一所
に連れて呉れろと仰るのか（清）イエ／＼左樣でハムいません
（正）ハテナ…提灯でも（清）否へ左樣でも（正）ソンナラどんな

御用で（清）サ其のお頼みは（正）其の御用卜ハ卜清子は色に云
ひ兼る仕打色々宜しく思ひ切ッて（清）貴方の所持の百五十圓
お貸しなされて下さりませ（正）エー卜懷を押へ喫驚てなし誂
へ此合方にあり（清）サ…其の御驚きハ御尤一面識なき御方に
箇樣な事をお頼み申スハ言ふにいはれぬ仔細の有ること今宵
の中に百五十圓の金子の出來ぬ其の時にハ夫と定めし其の人
の身に降りかゝる大難故せつなき妾の心を察し暫時の間其の
御金お貸しなされて下さりませト淚ながら手を合せて賴む（
正）ソンなら何と仰る此金を貸して呉れろト飛でもない事だ
ソリヤ己れの物ならどうとも志やうが大切な御主人ノ物家來
の身で勝手にそれば是れが眞の盜賊同然正直一方で御抱へに
なッた此の正作ソンナ自儘な事ハありませんトキッパリ云ふ
（清）御尤ではムりますれどソコを何卒（正）駄目などだ貸され
ません鐵面皮志ーお前樣ハ主家來の間柄を知らねエ者ダ見れ
ば學校の生徒衆の樣だが如何に文明開化して西洋の學問が流
行ても人間の道ハ一ッダ……必ぞ己を無慈悲な者と怨ましやる
ナ遲くなる卜困り升卜馬鹿々々しー卜云フ思入にて上手に行
きかゝる清も別れて下手へ行うとする時の鐘九時をうつこれ
にて清は鐘を數へて喫驚り仕打（清）アリヤもう九時」もう是

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

迄と云ふ思入にてツカ〳〵ト行き正作の袂を取り（清）モシドーゾお聽き入れ下されまし……（正）くどい〳〵飛んでもないとダト清を突き飛し足早に行きかける清は正のえりがみを取ッて引き戻す（正）ヤア女に似氣なき此の力サテハ己れは盜賊だナア（清）イーエさら〳〵左樣な心では（正）イヤ盜賊だ〳〵ト倘逃げにかゝるトタン提灯燃て雨車烈しくなり正は一生懸命に清を振り拂てヒヨロ〳〵トシテ眞中の誂への燈籠に衝き當る燈籠の火消えて眞黑となる之をキッカケに禪の勤め早き合方になり立廻り宜しく有つて清は思はず正を當れ正はうーンと氣絶す清も飛ンだ事をしたと云ふ仕打思案の思入れ宜しくあり（清）今に雫の咽に入れハ蘇生るには相違なしどうぞ許して下されましト思ひ切て正の懐より金包を出しホット思ひ入れ（清）濟まぬ事では有るけれど暫時の間どうぞお貸し下されましト金包を懐中に入れ……少しも早く先太郎樣へそうぢやト行ふとする上手より花垣先太郎長マンテル洋服長靴好みの拵へ蝙蝠傘をさし小提灯を持ちかけ來り花道の清をすかし見て（先）ソコへ行くのハ清子ヂヤないか（清）そう云ふ貴郎は花垣樣（先）チヽト先は舞臺は正に蹴躓き乍ら花道に來るこれにて正はウント蘇生る（先）心せく故實に失禮ト舞臺へ返らうとする清ハあわてゝ提灯ノ火を吹き消す（先）コリヤシマッタ（清）アモシト清ハ先の手を取り一散に向へ逭入る跡雨車穏かになり正ハ起き上り金の無きに喫驚り仕打（正）ヤ……少しの間に取られたろト尻もちをつく此時不思議の落しゝ寫眞を拾ひそかし見て見えぬことなし（正）コリヤ手掛になるかも知れぬ……未だ遠くは行くまい……そうだト立ち上り腰の痛むこなしにてどうトなる寫眞を握り口惜しき思ひ入れ此の仕組宜しく風の音凄き合方にて道具廻る。

近刊批評

政黨美談淑女の操

雜誌の小説と著書は小説と作意に相違は無くて、間々却ッて雜誌にある小説が通常の著書の小説より優れて居ることなども有る程なのを一般の新聞雜誌でハ批評を概して著書の小説に止めて更に雜誌の小説に喙を容れぬのハ惜しいとです。されぱとて世間數多い雜誌の中、わづかにその一二冋を取ッて事々しく評するのも迚も出來ないことで、假に出來たとしたところが又有益な評も出來ぬ譯でそ。

近頃都の花といひ小説萃錦といひ、大和にしきといひ、花くらへといひ純粋の小説雑誌として許すべき物も一雨ごとに冬ながら春を欺くばかり萌出して各得意の色をあらそひ香を競ふ此折から、かあり著者が丹誠を籠めた作と見えるのもまた其間に散見する甲斐には右四種の小説雑誌の中どれでもその一種が結局になるを待ち、公平な評を與へていくらか雑誌の批評の基を開くのもまた面白くない事でも有るまいと思ッて居た矢先、まづ早く結局を告げたのも依田學海居士の作に係る政党美談淑女の操で、すなはち是は都の花第一號から第四號までに亘つた世話狂言の脚本です。

すでに此著についてハ往々彼是の評も出ましたが、一般の處、道具建の面白くないのをこなし、その外の脚色にハ注目するものが少なく、やはり作者と振附とをば分離させぬやうに爲るのは甚だ心得難いとです。作者と振附とは兼ねさせるのは文學に容易ならぬ害を効すものだとは言はずと知れた話です。たとへばモリエルを凌ぐ筆、ラシンヌを眩ますほどの筆は有ッても今日の脚本の体裁は本文と道具建とを是非とも揃へて出すやうな風ですからそれがために折角の才を屈してあらはさぬものが世によく有ることです。

勿論依田氏とて此の弊風を破らうと盡力なされたとは申されませんが、吉野拾遺名歌譽をも何をも大抵の脚本はすべて川尻寶岑氏と合同して作られた、それを今度は局もあらためて自身に脚色を點綴し、更に他の人の手を借らず、それ道具建や何かは僅に申譯だけに置かれたやうに見えるのは何も褒めるほどの事でも有りませんが　まッたく誹るにも及ばぬことです。只之が一歩進んで全く本文だけに爲た方がいゝといふが至當です。

右は重要の点でもありませんが、しかし重要なのは右淑女の操の葦野道臣の性質と露子が死んだ一段です、まだ人は輕々しく看過ぐして居るらしうムいますが、しかし道臣の人物の現はし方は誠に旨く出來て居て、徹頭徹尾剛戻不抜といふ意氣が凛々として見えて居るのは如何にも顯官らしくて殆ど目に接するやうな心持が爲ます。實にこの道臣が剛戻不抜といふ一事が全篇の骨で、之がために頼國も逃亡し、また露子が死んだといふ大團圓も出來た、即ち比へればこの剛戻不抜といふ事は扇の要同様です。容易な物ではありません。その容易で無いものを最も容易で無いやうに隱現出沒して書現はし、大團圓の重量として十分に重く感せしめたのは流石に老手とは言へます。

露子を活かすか殺すか、隨分この點には議論がありさうですが、しかし一言この淑女の操は泰西の脚本に多くあるトラゼディ(愁歎物)に類した物で、すなはちセークスピーヤのローメオ、アンド、ジユリエツトと同じ趣向の物です。　一種俗を抽でた結局をつけられたれど面白うございますが、しかし憚らずに言へば淑女の操はまづ十分な結局の愁歎の色を出させて有りません。　油畫師が肖像を畫くに、色の配合には非常に心勞してそのため事に因ると配合に迫られて思はぬ顔色を赤勝ちに塗ッたり何かするといふ、その苦心その注意は此淑女の操にありますか。　悲しいといふ事を水際立ッて見せるには是非ともそれと反對の快活な事が前に無くてはなりません。　それが前にあればやはり雨天の櫻花、空の雲に反映して着色は一層でしやう。　それで結局をば採筆の山水といふ格で輕く書做して御覧なさい、その間の情致は口に言へますまい。　さて愛です　この主要の點が淑女の操に用ゐられて居ますか。　ヂツケンスなども好んで取用ゐたその名趣向をなせは用ゐなさらなかッたのです。　なせ結局は愁歎であるのにそれを際立ゝせるやうな快活な事實を考へは入れなさらなかッたのです。　これが殘念です。

その他照符の語句のちと繁縟です。　たゞ褒めるべき點はすなはち前二ケ條です。

三婦人雜誌の世評

國民の友がひとたび女學雜誌、貴女の友、及びいらつめの三雜誌を評してから以來、女學雜誌は老婆、いらつめは處女、また貴女の友は世話女房との評が一般に行亙ッて隨分不服だと見えて流石は老婆さまだけに女學雜誌などもは立腹なさッた趣です。　しかし、過ぎた事は仕方が有りません、今あれから歳もあらたまる處、なるほど今迄は三婦人雜誌も前の評で説盡くされて居ましたらうが、しかし來年からは女學の進歩と共にいづれ各々取る進歩が有ッて、或は老婆が若歸ッて處女になり、處女が嫁して世話女房になり、また世話女房が老いて老婆になるかも知れません。　今まで右三雜誌に批評を下さッた男子の方々、または品評の種になりますこの三美人共進會が。

流行

(一)　流行物見本挿畫の解

松葉小紋。　これは地が鼠に小紋が黒、そして松葉は

革色です。絹へ染出しても縮緬へ染出しても差支はありません。これと次の唐松小紋とは春衣に面白うござい升。

（二）唐松小紋。これも地が鼠に小紋が黒、そして松葉は濃裏柳葉です。これは絹よりは縮緬へ染めた方が美事です。

（三）獨鈷小紋。地は白、あるひは白茶、そして獨鈷は鼠です。夏これを布へ抜けば浴衣にもあります。冬着やそるよは下着です。一寸水際立ッた物ですが、しかし若過ぎた色合あるひば模様の上着の下へ着るには些不向です。あの小紋を下着にするからにはいづれ黒繻子の帯に藍微塵か藍鼠の上着を用ゐて取合はせなくては落付がわるうムます。しかし、言盡にすれば、わるく粋がッて古代更紗の下着を付けて上着と時に釣合はぬよそは増でしやう。

（四）唐草小紋。地は薄革色、地に小紋は黒、唐草の輪廓は黒、地は革色、中の小紋は黒、非常に高尚な小紋です。それでは帯は是非とも繻珍です、それも黄掛ッたのは禁物です。

（五、）（六、）（七、）（八、）この四ッはいづれも日本字のモノグラムです、すなはち阿岩　阿輝　阿光　阿芳などの名の方が用ゐてよい物です。此度のは簡畧の物でしたが、それから號を逐ふにしだがひ複雑した物をも載せます。

（九）脇下へ吊下げる香水瓶で、硝子製、あるひは銀製、あるひは硝子に金の書がある物。

（十）秋月の時計。時計の面（うら）を月に見立て之に雲を浮彫に爲せるもので猶それと相應してクサリをば雁の行列にした處、すなはち秋月と名づけた譯です。月は銀、雲は朧銀、或はつねの銀、クサリの雁も銀。

かんざし

さしあみがかありの流行です。物は紫銅のが次第に出來さうです。それ新形をこれ號へ載せるつもりでしたが、繪が出來ませんので次號にゆづりました。

春着一班

それぞれの小紋。あるひは薩摩絣。

名刺

定紋を姓名の上に白く打出したのがそろそろ流行だしました。もし紋が混雜して居れば崩して打出します。

寄書

不二のたかねの彼方の竹子孃の御手紙を拜讀仕り、同情とやら云ふものゝ切りに起り、抑へやうとしても抑へつけることが出來ません故まはりもせぬ筆でかきましたが没書は元よりのことと思ひます。しかし、

成美社の記者の眼にふるぞよと思へばうれし没書さるゝも。

と云ふものは逢隈川の片邊り岩瀬の里の

かのまた、まつなへ。

何程此の世の中ゟ變遷致しされればとて進化致したればとて千年や万年の中にはなかなか蛙の子が龍になり、鮒の子が鯉になると云ふやうなことはありますまい。これは是と致し人間社會の中にてもまアそんなもんで、華族の子は華族、士族の子は士族、平民の子は平民、商人の子は商人、工人の子は工人、農の子は農、學士の子は學問、政治家の子は政治に長け、又貴人の子は貴く、賤者の子は賤く、富者の子は豊に、貧者の子は乏しくあるのは斯くあるべき道理で、斯くあらねばならぬ譯でせうけれども私は聞きたいのです、何せ人間が生れましたか何せ貧富貴賤の差別があるのでそか、何せ天は不公平なのですか、何せ私をば花の都に高等女學校や、華族女學校や、學習院や跡見女學校や女子職業學校や成立學舍やなどの有處に生れさせて下さらなかつたでせう。何せ私共をば此の世に此の不公平なる世に此の女子教育の夢もなき片山里に產み出したのでせう。などゝ云ふた處が前申た鮒の子蛙の子で。鯉とも龍ともなられぬさ元よりのと云ふ丈野暮です。しかし一言申したいのは。申さねばならぬのは。如何に蛙や鮒の見下け果てたる者にもせよ。せめては蛙の子は蛙。鮒の子は鮒になる丈のとには。御力を御盡しなされても。よいのでせう。爰ゟ竹子孃の申された不完全な今日なのでそ。女子を持てる親々の大層心配して居る處なんです。花の都とかんとも知りませねど片山家なる當地方にては下等人民は下等人民何とも仕方かないのだと人も云ひ自も自すてゝ安心して。下から上に降る心配はあり申さぬなどゝ云ひ居りますれど旦那とか某樣とか云はるゝ中等以上の方々に至りましては女子を育つるの御心配は並み一通りの事でも有ません。女子を賴む。安心して女子を賴む學校なく女子を教育するの定見なく。成人させるの標準なきのに苦しまるゝは。なかなか私などの云ひ能ふとではありませんなゝ何せ世の中と云ふものは此樣なのでせうはてど

したらいゝのでせう。我福島縣などには高等小學校を卒業した女子をば、教育をするとも取扱ふとも申すべき所はないのです。婦女子方の集會とか云ふやうれともないのでそ、猶更男女交際などゝ云ふことは時事新報の寢言と下等社會の盆踊より外はないと思ふて居るのです。中等以上になりまするとと女子は猶のこと男子なら。上りたいが彼の家には娘があつて、などゝ云ふ有樣です、中等以上の方のお娘は十三四歳位迄は小學校に通て居りますが。それより后は太陽を見ぬ日が多く友に逢ふ日が少く徒に親の傍に屆んで居るか。さなくば下女や洋犬や猫を相手にさわぐ位のことださうです。それでそから結婚も自然見ず知らずの人に親々の承知のみで約束してやると云ふことなのでそけれども何んとかしていゝ工夫はありますまいか早く竹子さんの御論を拜見致したいものです。

はてな

美津晴子

澄渡つた秋の夜の空。一片の新月を西山の端に懸けて何となく物寂しく、降る露に堪へ兼ねて脆く小枝を離れてくる錦の木葉は坐ろ深窓の佳人に斷腸の思を起させます。あの高尙幽玄の蒼穹に綾どつて居る幾千萬の星姬。恥しさうに見え隠して……恨めしい

あの面白そうナ。嬉しさうナ樣子……寡婦の嫉妬を引起しましやう。夕靄に麓を包ませて此方の常盤木の間から朱丹の樓閣を見はした奥床しい東叡山。前に浮んで居る辨天の堂宇其石橋の上に見はれた二人。夜目には誰とも譯りませんが。一人は慥かに女性です。シテ其話し方の優しい所から想像して見ると以良都女十七號の插畫にある輝子孃に五つ六つも姉さんらしく先程から談があつたでしよう……嘸濃な……併し殘念なことには作者は聞落しました。

「此頃は實に奇体ですネ　此方に妾等は男女同權を主張し參政權を握らんとする明治新舞臺の婦人で御坐いますと破れ鍋聲イヤサ御免遊ばせ。美妙な聲で御披露になれば。彼方には男女六歳にして席を同せぞとか云ふ絶交主義を蚊の樣な聲で揚言遊ばす婉姚たる淑女……テモ雙々並んだ奇觀でネー尤も國會は眞近に逼りましたからネハヽヽヽ併し參政權……絶交主義……とは驚きましたヨ」

女性は笑を含んで

「何よ參政權を主張遊ばすお方はヤット五十路許りの孀女ですとサ。オホヽヽヽヽヽそれでもお可愛さうなのは少女衆ですヨ、罪もないのに彼中へ捲き込まれて、御覽な

さんそれや大變ですワ、其れに彼以良都女記者も沈默きつて(フン出たか)位で未だ毎月一回の發兌ですヨ。ほんとふ氣樂ではありませんか? 若し妾が記者あらあんな折には直に發兌の度數でも增して淑女方を助けますワ。」

「チヤ〳〵大層は熱心に以良都女をお褒あさるチ」

「それだッて貴下淑女方を優美溫良に導き、眞正の智識を與布そるのが以良都女の主義でそから…… 其れふ貴下社會が頻繁に趣きまそから倘……

「も一澤山です記者はそんな所は充分知つて居ますヨ。きつと來年から貴孃が思し召通りになりませう……若しならなかッたら淑女方の一揆で成美社を取卷て御覽なさいそりやどんな堅固な屋敷でも陷りますヨ　ハヽヽヽヽナヽ寒くなつて來た歸りましやう」。

立上つて覗き込みますと頭は垂れて襟の中へ頤を入れて……妾き雲が頤の邊ふまでついて居ますそ多分溫んで居ふでしやう。パッチリとしたの眼に……しかも千萬の思を湛へて……情ない男は無頓着の樣子で二三步進みましたが……振り反つて

一サア早くいらッしやいヨ餘程遲いから急があけりや……何時でも僕が…

濕んだ聲で

「其ざッて又暫らくは目にかゝらないと思ふと何んだか…

「何に暫らくつて云つたつて來年ですがチエ。來年になッたら歌留多取て遊びましやう」。

「歌留多ほんとには面白うは坐いますチエ、遊ませう。きつとですヨ。チヽ寒い。もチッと此方へは寄遊ばせ……サあうして行きませう」。

取る手は心臟の鼓動を傳へて劇しく脈を打たせて居る……途端に打出す時鐘、驚いてすりよる兩性恐ろされて飛立つ水鳥、友に離れて叫ぶ鳴聲凄寥と云ふ慢幕を打破つてサワ〳〵として居ます。はて何事でしやう

家政

禮儀の事

均しく同じ火藥でも那勃翁が用ゐれば瞬く間ふ數百人の命を奪ひ、まさ石屋が用ゐて石を堀出せばその石は慈善病院の基礎ともなります。　盜石堯舜の飴、その理はいづれも同じです。　禮儀もまたその通り。　用ゐやうに由ッて二樣の結果が有ッて即ちほどよく之を用ゐれば極めて必要の物ですが…あろし惡く之を用ゐれば虛禮といふものにありまそ。

虚禮ほど醜いものは有りません。手紙の文に恐々頓首とか叩頭百拜といふも虚禮です。挨拶に幾度も〳〵辭儀をつゞけるのも虚禮です。禮。之をほどよく用ゐれば實に人間社會が圓滑におさまつて。云ふに云はれぬ品位も出て來ますが。もし一旦あやまつて之が事々しく用ゐ過ぐされなば却ッて人の不快を釀す原因となるものです。

いくらか世が進んで來るにしたがつて相手の心持をよくさせ。交際に親密の度を加へ。それで我身にも愉快を感じ。物事を圓く治めやうと思ふ心が次第に發達して來る。それがそもく禮の起ッたはじまりで。之で尊卑の分をわけるだけ卽ち之の用ゐ方で愉快を得ると得ぬとの二つも始まッたものです。無論人間自然の心のはたらきを滿足させるために出來る物ですからその必要なのは云ふまでも無いそこで。禮をば交際の要と云ッても差支は無い程のものです。なぜにあれだけの必要、またあれほどの性質のあるものを、よく用ゐずして虚に走らせるのはそもく案外な話ではありませんか。なるほど虚に走るのは禮を缺いるのよりは幾許か宜しうムいます、しかし、强ひて云へば過ぎたるは猶及ばざるが如しで、大方は五十步百步の間です。支那はあのとほり禮儀の正しかつた國ですそれがゐ却つて虚禮が多くはじまッて。その波は日本にまでも及んで居ます。元より虚禮にするといッても何も惡意のあるのではありません。實に禮を厚くしやうと力め過ぎたのが却ッて無益な境に陷つて仕舞ふのでその虚禮を用ゐる人の心中は決して批難すべきものではありません。たゞその不注意、それが可笑しいと笑ふまでゞす。

さて本文からあの頃の淑女諸君の禮法に移りましやう。學校へ御出になる方々はいづれも泰西及び吾邦の禮式を御學びなさる事ですから大した失策はありますまい。隨分中には禮を失つて居るやうに見える方もありますが、なろしそれは實に少數で、そこが婦人の婦人なる處、極めてなさしい間柄同士を除くの外、總じて皆中々慇懃に爲さいます。あれで猶殷懃が過ぎて馬鹿丁寧といふ處までは至らぬ工合、實に……目今のありさまは印紙張つて褒めてもよろしいのです。されぱとて粗暴なことをばいゝといふのでも有りませんが、たゞ此頃の若い淑女の方々の禮義の行ひ方は中々よく中庸を得て居たのが多くあるといふのです。あまり長過ぎる御辭儀はもはやセリウリに出しても宜しい今日、禮儀も相應がよろしいです、虚禮に過ぎたのは却つて心面白くないものです

受取書を取る事

買物をしては、かならず受取を取ッて置なければ爲りません。受取を取るのは中々面倒な事です。しかしながらその買ッた物が時として氣に入らぬことが有るかも知れず、その時に受取書が無ければ返却に行ッても十分な口が利けません。ずゐぶん顔を知合ッて居る家や、またハ一寸した品物の事ならば受取を取る必用ハ無いやうですが、しかしそれでも取ッて置けば他日また參考にならなくもありません。

產室の心得

前號に御約束いたしました產室の心得を述べますまへに前號で書き落した事を一寸述べます。又姙娠でゐる中に水の樣なものや血が出ますのは流產の前き觸れてございますからやうなときは靜かに臥ッて醫者を呼ぶがよろしい。又臨月になりましてお腹がいたみましたら多くハ赤坊の居處が變たのですから醫者か產婆を呼び入て診て貰なさい

さて是から產室の心得を述べましやう。お產をしますと精神はぼんやりし体は勿論がッかりしまして其後間もなく眠くなりますから穩にお休みなさい。產後二三週間は初めは血や血の塊が下り後にハ白血が下りますが少しも心配にハ及びません唯清潔にすればよろしうございます。產後は体が弱てをりまして色々の病氣に罹りやすうございますから食物も用心し風邪を引かぬやうに大事になさいまし又熱が出たりお腹が痛みますとき特に初め惡寒がして次で熱の出ますのハケンノンな病氣になることがありますから若しかやうの事がありましたらば直ぐ醫者です。大概產後の病氣は不養生と風邪と陰部を不潔にしておくからでございます。

出產後ハ今迄の蒲團を必ず用ゐてはいけません。新しき蒲團又ハよく日に乾した綿のぶく〳〵してゐる蒲團と替へて靜かに穩にお休みなさい。家の北側の室に多くは產室がありますが是は極よろしくないので南側の室に限ります。そして室は空氣を入れ變て室内は清潔にしておかなくてハいけません。

食物は自分の氣に向た消化れのよいのがよいです。大小便の通事によく氣をつけ三日もないならば醫者の藥を賴みなさい。

衣服の好（承前）

衣服の事に付きては時の流行もありまた人々の好もありて一概には申されませんが体の骨格又は肉色等に考を込めず徒らに流行を逐ひ好みに溺れては可惜人品を落すやうなことがありますから茲に一般の心得を述べましやう。衣服の色合は通例藍とか鼠、茶、黒の様な十人好のするジミのものを用ひ帯紐類にも稍派手な色合のものを用ひないものです。身の廻りを派手な五色で彩つたやうな拵よりはジミたる色の衣裳を帯締の派手な色で引立たせた拵の方が見處があります。

又衣服の色合のえらび方によりては折角天然の麗質をも臺なしにし、あまりドットしない顔付も引立つものです。前に申したジミた色はドンナ質にも似付きますが顔色の白き方又はほんのり紅のさしたる顔付には紫色が適し淺黒き質には白茶の類が適します（危險な薬を呑で顔色の蒼白になるのを好んでする方々のあるのは一向に解せない）。又背の矮き人にも縞の衣服が適し背の高き人若くは痩形の人にも小紋類が適します。粗き大縞または小紋はやさしく見えるものでなく淺ぎ色の衣服は肥つた人を一層肥つて見せます。

世間の婦人方は兎角世間で一般に流行するものは誰にも似合ふものと思ふは大なる誤りです又背高く痩形で長方な顔の人の風を見て直ぐ背矮い丸顔の人が其風ソックリ眞似るも大なる了簡違ひです。すべて身の仕度に付きては他人に不愉快を感せしめぬ様にとの考でする内にも如何様にも注意してなされて宜しい譯ですが是が直ぐと衣装自慢容貌自慢となると祟になりまそ。

雑纂

それは昔あれは今

麹亭飯人

頑たる結髪その形チョン、粋なる散髪その容イキ、それは昔あれは今。アッサリとして其レ妙なりむすめ島田、ヒ子クツて其レ奇なりレディ束髪、それは昔これは今。杓子定規の袴羽織、於手軽様のヅボン、マンテル、それは昔あれは今。螓首蛾眉その腰柳の如き美人、短髪凹面その尻臼に似たる別嬪、それは昔これは今。貧且賤にして恵むに名を掩ふ隠君子、富且貴にして商ひに顔を晒らす慈善會、それは昔あれは今。優にしてやさしき音は琴、三味線、急にしてせわしき聲はピヤノ、オルガン、それは昔あれは今。芝居の開祖は川原乞食、舞踏の本尊はやんごとなき紳士、それも昔あれは今。義を見て勇ある江戸ッ子風、腐

敗の評ある府民かたぎ、それは昔これは今、暴虎馮河死して悔ひなき果し合、悲憤慷慨命をしまぬ決鬪狀、それは昔これは今、嗚呼ゝゝ今の昔に異なる、などてか斯くは甚しき、而して時勢の移ろひ易き、昨日より今日、今日より明日と、日にけにかはり行くものなれば、昔に善にして今に惡、今に美にして昔に醜なるは、免れがたき理りならん。さはれ昔善と思し中にも猶惡あり、今善とおもふ中にもいろいろ醜のなからん、と文机に頬杖つきて、獨言する後より、聖人は能く世と推移す、とこそ聞きはべれ、さる齊東野蠻の言語は、いまはしうこそ思ひはべれといふ、誰ぞと、顧れば、例の童子なりけり。ヤヨゝゝ童子よ、さても汝はナマイキになりたるものかな、彼の紫の朱を奪ひ、鄭聲の雅樂を亂り、碔砆といふ石の玉に似たる、犂牛の子の羊に似たる、佞人の賢者に似たる、汝らも亦はや流行熱に侵かされて、傳染病に罹りためり、良禽は木を擇みて栖むといふなるに、善惡美醜の差別もなく、汝も亦腐敗したらんか、さらずば無神經になりたるか、と詰れば、童子はウ…ウン…そ…それ………それも昔これは今。

通信問答

社告　これまで本雜誌には化粧欄を設けて置きましたが、世間の淑女からの通信のお問合せに化粧の事が澤山ありますから此度からその欄は全く省き、從來取扱ッた化粧の事はこの通信問答の中で申します。

夕霧令孃へ　藝妓社會に書生羽織が流行するのは、おたづねでは有りますが、些しも新らしい事ではありません。これは三四年前から既に流行して居ることです。しかし、淑女の方々は決して書生羽織をお着なさる物では有ません。

麿子さまへ　(一)リスリンは顔の荒れるのを防ぐ効があります。(二)鼻血を止めるにも何か物をつよく嚙むやうに五六回つゞけて腮に力を入れるのです。之で止まらなければ猶つゞけて爲さい。きつと止まります。

ともゑ女史へ　(一)おたづねの趣、まだお歳もお若いのに急に痩が出ましたのは姑息の療治ではいけませんから之は然るべき醫者におかゝりなさるのが宜しうムいます。(二)出齒は直りません。隨分はげしい醫者も無理に直すこともありますが齒のため毒です。(三)鐵漿ははげしい酸類の力を籍らなければ齒につかぬものです。その齒につくといふれは齒

の班瑯質、すなはち齒をつゝんで居る硝子様のなめらかな面をざら〳〵に爲せることで、この班瑯質が滑である間は迚も鐵漿が乘るもので有りません。さてその面をざら〳〵に爲せるといふのも齒を保護する物の力を殺ぐなどで、年久しく經る間には次第に班瑯質を脆く爲せてしまいます。鐵漿が齒に毒だといふのはこの譯で、今まで用ゐて來ましたのも只れ習慣によるもので、野蠻の名殘です。はじめは男子も染めました、公卿などのやうに。（四）撒兒沙根を六十四オンスの水に入れて必ず四時間煮すとも三十二オンスまで煮結めさへすればいゝのです。

石川しづ子さまへ　（一）にきびを去る有効無害の法はやはり硼酸とリスリンと橙花水との混合液、すなはちいらつめ第十二號化粧の部にあつた藥で治ります。（二）左右にひろげて後手を一處に集めるのは好ましからぬ風だといらつめ第十六號に出ていたのはつまり餘り氣取過ぎたのを戒めたのです。藝妓などの御辭儀の仕方は遠くから手をひろげて後に一處に集め、それくせに頭の下げ方は麁末です。あれでは婀娜すぎて淑女がたの爲さるのには適しません。あまり遠くからひろげてさへ來なければつまり論はないのです。（三）あれはちと危險ですからよく吟味して次號に出します。（四）支那の腕組は腕組ではありません、手を捧げるのです。それゆゑに是は失禮とは取れません。日本でいふ腕組は如何にも倨傲な体です。遊惰の風です。それ故にあれは失禮なのです別に理由といふほどの事もありません。

陸中盛岡田舍娘さまへ　顏が赤いと仰やるのは臉燒ですか。それならいらつめ第十六號に療治方があります。もし、顏全体に色が赤いのですなら第十二號色を白くするといふ法で十分なほります。

美濃撫箏女史へ　（一）うつぎ花と卯の花とは同じ物です。「わが門のわざ〴〵植うべき日をちかみ、かきのうつぎの花さきにけり」とは歌にもあります。（二）齒磨に食鹽を用ゐるのは至極結構ですが、しかし鹽は上製食鹽に限ります。（三）もとは喧ましうムいましたが、今は大抵何處へでも用ゐても宜しうムいます。何やら紅熨斗は婦人に限るといふやうな風にもなツて來ましたから。

松岡小夢女史へ　（一）蜜柑も葡萄もよく乾いた砂を盛つた樽へ肌と肌を接せぬやうにして入れ口を密封して置きます。（二）女子家庭の教育につき先注意すべき点といッても一朝一夕

に擧げたばかりではいけません。

貴奴孃へ　額ハ生際ハ好み次第に左の藥を塗れば自由に濃く生り、またまだ生えぬ處にも毛は生えます。　其法は枳殼を丸のまゝ黒焼にし、等分ニ眞菰の灰を交せ、これを適宜に胡麻油ニて解き、それを筆で塗り込むのです。

阿部令孃へ　(一)如何にも唱歌の時痰が出るのは困ることです。　左の方は乾度効能のある法です。　すなはち、梨の汁(猪口に三盃)、生姜の汁(同上)、最上の焼酎(同上)、白蜜(猪口に一盃半)

この四味をカラカ子の鍋で煮ながら猪小人參(一兩半)、唐白朮(一兩半)、貝母(三兩)を加へると十分の煉藥が出來ます。之を一週間も日ニ一度乃至ハ二度づゝ内服してハ御覽なさい。　かならず成効が有ります。

(二)聲をうるはしくするのハ害のある食物ハ鹽の辛い物でも醬油なども多く用ゐるのは最も惡うムいます。

小蝶さまへ　傳授書のやうな物ハなるべく迂濶にハ信じなさらぬ方が宜しうムいます、多く射利のために作ッたものが有るものでそろら。

岡田令孃へ　紫銅の赤くなッたのを黒くするニはその紫銅に菜種油を塗り、その上を硫黄で擦るのです。

第十七號疑問の答

熨斗ハ濫觴

東宮鐵晋

進物に伸鮑を添ると古ハ曾て無き事あり今世も太刀目錄にハ伸鮑を添るとあるし是ニのみ古風失せざるあり云々(四季草)今時貴人へ御目ニ懸る時御手のしとて三方にのし鮑を据え其前に結たるのし鮑を三ッ斗置て御前へ置時其結たるのし鮑を貴人手づから取て給はる事今の世のあられしあり云々(貞丈雜記)など伊勢貞丈の言ひたるニよれば熨斗を用ゐるとは古き風俗ニはあらざるが如くにて其濫觴も詳には知り難けれども愚考するに古代客ニ饗應の最初に手掛といふ物を供したり(六角に折曲たる臺の上に五色の削り物を高盛にするを云ふ)其中ニ伸鮑も雜れり何時の頃よりか此ハ手掛と云ふ物を略してたゞ伸鮑ばかりを臺にのせて一番ニ客に供するとゝありそれより漸次に轉々して前に擧たる如く人に物を賜ふしるしの物に用ゐるとになりそれより又轉して一般に進物ニ添て用ゐるとゝなれるなるべし

因に云ふのしあはびをば伸鮑と書くべし熨斗とは衣のしはをのばす火のしの事なりされば熨斗の字ハ其義通せす又のしあはびをのしとばかり云ふともあやまりあり

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

熨斗の濫觴　小相澤つう

熨斗とハ熨斗鮑の事にて昔し伊勢二見ケ浦の海士鮑を剝延ばし大神宮へ供へしが、遂にこれが例となり、今に之を供へしとぞ。而して伊勢の御師は秡の大麻に添へて信者に配する事にせしより遂ふ一般進物には必ず添へるの例となりしとある書ふ見えたり

は返答ありがたく存じます。因つて生駒うさ子令孃に代り、記者から右は二方へいらつめ第十八號一部づゝ差上げます。

文藝懸賞

本年も早歳末に差迫りましたから氣樂な餘興の新題をば省きまして、その代りひとつ文藝懸賞の題を出します。

題　冬の夜の團欒。

右しめきり一月十五日かぎり。

原稿ハ楷書、平假名

歌ならば和歌にても今樣にてもその他の唱歌にてもよろし。

文章あらば如何ある文体にてもよろし(但し滑稽の物は禁物)。

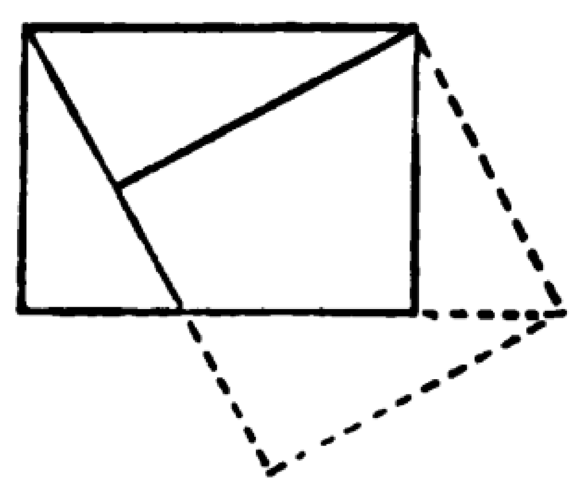
文章和歌とも**懸賞**は甲の君へ**いらつめ一ケ年分**乙の君へ**いらつめ半年分づゝ差上ます**

いらつめ第十七號餘興の答

(一) 炭

(二) 夜

(三)



(四) 桔槹

(五) 蛹

(六) 二輪の自轉車

(七) 白毛の筆

(八) 郵便切手

皆當者　高山はる子△木村一枝

六題以上解答者　吉田靜子△奥村まつ子△河邊碩△松岡トモ子△奈合勝子△進藤久哲△木下英太郎△太田はや子△伊藤てい子△鬼頭孫三郎△窪田訪子△小縣文夫△石川富士△中野宇喜子△大熊いつ子△小島鶴子△關澤金女△吉原佐多野△森島寛子▲槐月陰史△岩木はな子△富永孝子

皆答の二君へ申上ますお約束の通金港堂小說一冊宛差上げますから御望の品御申込次第早速送ります

月報

○皇后宮の御仁恵　我皇后宮の聰明慈仁にわたらせたまふてとは申すも畏きとあぐら、前には東京慈恵醫院に臨ませられて親しく在院患者を御慰問あらせ、且つ赤十字社等へも痛く御心を掛けさせらるゝあとは世の人れ夙に感泣する所あるに今回は更に幼老院といふを設け、告くるなきの孤獨をも救濟あらせらるゝの御思召にて、その方法等を取調べさせたまふよし承ハる。

○上田婦人會　長野縣下小縣郡上田町ある女學校の學生數名が首唱者とあり郡長其の他有力者の贊成を得て上田婦人談話會及び同會範圍内に於て女子手工部といふものを創立せりといふ

○奇特なる婦人の事業家　群馬縣南勢多郡關根村研業社繰糸敎師兼工女取締を務め居りたる西塚梅子は明治初年の頃より繰糸の業に熱心し西洋人に就て種々製糸の術を創めて首尾能其効を成就し諸縣の有志家などにも其術を傳へ製糸業者に與へたる利益ハ實に少からさる由にて官よりも其功勞を賞せられ前後八度の褒賞を授けられたりと然るに去月中病のために黄泉の客となりたるは惜むへきの至なり

○婦女子研學會　今般宮城縣志田郡古川驛高等小學校の女敎師新妻葛岡の二氏を始め裁縫敎師尾花氏外數名の發起にて設けられ其主意ハ專ら幼年女子を重とし傍ら有志婦人の加入を許し隔日に女子必要の科を敎授して婦人の敎育を進むるに在りと又毎月二回學士の講談ありて目下會員五十餘名に達し贊成者補助委員中には市中の名望家も數多ある由なり

○東京柳北女學校　も亦近時追々盛運に赴き從來の建物にては狹小なるに付き今般新に煉瓦二層の一棟を增築する由各女學校の日に增し榮へ行くは誠に國家のためにも目出度ことなり

○婦人懇親會　長崎縣西彼杵郡大草村喜々津村有志の細君達が發企にて兩村婦人（未婚の婦人を除き）懇親會を創立しその趣旨は金員若干づゝを積立て會員中若し凶災に罹りたるものあるときハその積立金中の幾分を贈與してこれを扶助するにあり目下兩村中等以上の婦人は悉く入會し居る由尚その例會は毎月一回これを開く約束なりといふ

廣告

毎月二回　花の都

十二月十六日發行第五號目錄

●花ぐるま……（續き）……美妙齋主人
●許嫁の縁……（終り）……秋月女史
●めぐりあひ……（續き）……二葉亭四迷
●藤の一もと……藤陰隱士
●中原の鹿……（終り）……流鶯散史
●浮世……霞亭主人
●華胥の夢……（終り）……槐堂仙史
●竹間善文……學海居士

挿畫

●林下美人の圖……鈴木華邨
●少女貧人を惠む……武内桂舟
●公子短冊を把る圖……五舛田芳柳
●懲忠成氏を諫る圖……河邊御楯

一冊代十錢十冊代九拾錢

郵稅一冊ニ付二錢（廣告料壹行拾錢

發行所　東京日本橋區本町三丁目　金港堂

いらつめ　第二巻總目錄　第七號より第十八號迄

論説

新年を祝す　一
婦人と新聞紙　三五
膝とも談合　六七
女子教育の方針　九七
社會の組織と結婚の弊害　一二一
婦人に關する社會の風潮　一五五
女生徒を以て實驗の犠牲となすこと勿れ　一八一
日本の婦人に望む　二三一
女學の進歩　三三三

家政

西洋婦人家内の實況＝小兒の育て方　九
清潔法＝保健食料　六三
注意の價値　七三、一〇四、一二七、一六三、
小供育て方　七三
室内の装飾　一〇四
をとあしい娘＝病室の心得＝甘い母親　一二七
急病療法　一六三
百日咳療法＝習慣の話　一八三
小兒育て方神童才女の話　二一五
小供と物語本　二四一
禽獸を虐遇する習慣を小供に付る事　二四二
帳簿を嚴ふ買物を現金ふ　二四二
古き天鵞絨を新しくする法　二四五
妻らしい妻　二七三
安直で美衣美食を得る秘傳　二七三
女生徒の衣服装飾　二七五
レモンの効用　二七七
細君虎之巻　二七六、三〇二
衣服の好　三〇一
額縁の洗ひ方　三〇三
産前の心得　三〇三
禮儀の事　三五〇
産室の心得　三五〇
受取書を取る事　三五二
衣服の好　三五三

小説

ふくさづゝみ　三二六
空行く月　六六、九八、一二三、一五七、一八六、二四六、二七七、三〇五、三三四、

講義

美術の話　一六、四三
用器畫稽古の仕方　九二、一一三、一七三、一九九、二二四、二五〇、二七九、三一五、三三六、

文藝美術

和文を學ぶ捷徑　一九
新形の花かんざし　二一
婦人の手紙認樣　二二
樂典初步　四六、七七、一三六、二三九
新形の封袋　五一
繪書　五二
新工風髮飾＝日本古代男女裝束　八三
本歌取り樣の諸說　二二六
花と花瓶との關係　二二八
柳櫻都錦繪　二八四、三一九、三四二
讀音法　三一八
正本はむれッと　一四一、二一七、二五二
文殼　三三七

學藝

食道之效用＝最も湯の出易き急須　二七、二八
樹木を見て地質を識る　二八
炭薪を儉約する法　五五
蟲の話　八四、一〇七、一四七、一七一、一九〇
忠義な馬　一一〇

叢話

仇を恩　二九
鼠おとし　五七
酒井忠直の夫人。歡樂の餘波　八七
現時物語娟引の卷　九〇
桃と櫻の會話　一一〇
緣組を占ふ奇法＝惡聲憂ふるに足らず　一四六
蒔繪の名　一四七
文學大家平生會話の巧拙　二〇一、二五六、二〇〇
人工の片輪　二一八
茶碗を打つて年齡を悟る奇術及び其理　二五八
露國育兒の奇法＝婦女のいましめ　二八一
それも昔これは今　三五三

批評

詩人の春＝肺病養生法＝西洋女大學　三〇
戰塲の花　三二
交際の栞＝女子教育新論＝侠美人　五八
學海居士里見八犬傳の批評の批評　九一、一一七
みあれざを　一一八
一喜一憂捨小舟　一一九
浮雲細評　一四四
明治の細君＝高崎男爵新作かざしの菊　一六七、一六八
物集高世氏新作水の江　一六九
明治唱歌＝藪の鶯　二〇三
本鄉ＭＳ生に　二〇五
新編紫史細評　二三四

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

渡邊鼎氏洋服採用の可否　二五九
自由鏡初篇　二六二
今世ひめかゞみ　二六三
婦人言論の自由‖夏木たち　二六四
洋服案討議　二八六
文覺上人勤進帳‖新婦人‖君子と淑女　二九四　二九五
新文學誌‖文明の母‖晃山記遊　三二四
情‖都の花と小説萃錦及びこがね　三二五
女學雜誌の舞踏論　三二五
政黨實談淑女の操　三四四
三婦人雜誌の世評　三四六

流行

新流行の櫛‖簪‖笄等　一〇七
流行せる勢のある蝙蝠傘　一〇七
衣服羽織地‖ハンケチ‖香水‖靴　一三三
淑女夜會服‖男子の洋服‖ぼふん　一三四
烟草入‖烟管‖夏帽子　一三五
縮珍の帶‖スキヤ‖若き貴婦人の夏衣　一六六
十一二歳より十四五歳迄の少女の下衣　一六六
扇‖婦人洋服直段付　一六六
單物‖開化牡丹の簪‖金足不水晶玉の簪　一九六
銀蒔畫の櫛‖すみれの香水　一九六
香水瓶を下げること‖朧銀の時計側　一九六
婦人洋服の飾釦鈕を襟留ﾆ用ゐること　一九六
玉盡くしの時計鎖‖孔雀扇　一九七
鐵柄の蝙蝠傘　二二二
米國貴婦人間の日本風の流行　二二二
少女の帷子白阿波ちゞみ‖茶臺の復古　二六四
若狹塗‖梨子地の筆軸‖灯燈形のホヤ　二六五
薄紅色の服‖帶地‖衿地　二九〇
袖口へ丁子龍腦麝香を縫込むと　二九〇
銀製御所櫻の簪‖つかみざし　二九〇
上着下着等‖羽織の掛金および紐　三一三
此頃の女生徒の衣物の着様　三一四
着物に半襟を掛けぬ新流行　三一五
松葉小紋‖唐松小紋‖獨鈷小紋‖唐草紋
本字モノクラム‖香水瓶‖秋月の時計‖
簪‖名刺‖春着一班

化粧

化粧薬えらみ方‖肌のキメを貭くする法　三一五
手の色を白く滑ﾆする法　一六七
日ﾆ燒ける手を白くする法　一六七
曾違で髮毛を洗ふ善惡‖髮毛を保存する法　一九八
毛を延ばす奇法‖牛乳で顏を洗ふ可否　二二四
肉色を麗しい薄紅色ﾆする法　二六五
顏の肌理ﾆある汚物を去る法　二六五
齒の色の黄色ﾅのを除く法　二九三
爪ﾆうるはしくする法‖髮垢を去る法　二九三

佳傳
まアぢれッと　四一七
原かね子の傳　四一八

通俗衞生學講義　一　五　一三　二一　二五　三一　三七　三〇九

寄書
束髪詳論　一四八
婦人の洋服に付て　一七四　二九一
和洋兩服の利害可否を論ぞ　二一一
如何に女子を教育そべきか　三二三
竹子孃の御許へ　三四八
はてな　三四九

通信問答
靴を永く持たせる法　一八〇
燒餅を燒くといふ事‖ハンケチで會話をる法‖黄色にあッたフラ子ルを洗ふ法‖皺のよらぬ法‖日本字モノグラム‖水引の結び樣‖熨斗の事‖夜の到來物‖御辭儀の仕樣‖しつけの事‖白羊の手袋‖臉燒を治す法‖小豆を早く煮る法‖松魚の虫を防ぐ法‖蕈類の毒を試す法‖松蕈れ貯へ方‖銅鍋の錆を引く法‖かすていらをふくらそ法‖ユデ卵を殻のまゝ切る法　二九五
簿記學ふついての問答‖顏の色を白くする法及び毛生藥の事‖葱辣韮あどの後口の臭きを直す法‖カバンの汚を洗ふ法‖聲をよくする法‖白地の着物に墨のつきたるを落す法‖めで度ろしくの解‖唐縮緬をフラ子ルふ似する法‖髮の薄きを濃くする法‖肥滿を防く法‖雨中吟未來記‖三鏡‖色の黒き肌を治す法‖香水の直段‖リスリンの効用‖鼻血を止める法‖　三二九
鉄漿の毒‖にきびを去る法‖辭儀の仕方‖顏の赤きを治す法‖うつき花と卯の花‖齒磨に食鹽を用ゆる事‖蜜柑と葡萄の貯へ法‖女子家庭の教育に付きて‖額の生際を濃くする法‖痰を止める法‖聲をうるわしくそる法‖傳授所ふ付きて‖紫銅ふ付て　三五四

いらつめ第二卷總目錄終

私立 女子文藝學舍學科增設廣告

○本舍從來ノ科目ハ和洋服裁縫編物挿花點茶英學數學和歌ノ八科目ナリシヲ今般琴漢學ノ二科目ヲ增設シ且生徒ノ新入ヲ許ス○郵券二錢御送附アラハ規則書ヲ呈スヘシ○當舍ハ規則トシテ束脩ヲ要セス

麹町區中六番町六番地白蓮會ニ於テ

私立 女子文藝學舍

●文明之母第三號目次 十二月十五日發兌

○定價一冊金九錢外郵税一錢○半年分金五十二錢○一年分金一圓○見本は一錢の郵券十枚

社説 寧ろ繡絆を縫はん○スペンサー氏女權説の評論 ●論説 作文に就ての心得（中村秋香）女子諸君に注意を（三刀谷扶綱） ●家政 不思議の話（人心及物我の辨）ＳＡ生

藝 十二月歌（正二位有長）○阿彌陀佛の歌（藤原爲兼卿） ●小説 劣夫傑女譚（山縣悌三郎）○水仙花（鐵將軍）

●批評 やまと叢誌○貴女之友○いらつめ批評の批評 ●雜録 マリア、エーサヘスの傳○大內常姬○松村紹巴の頓才及び明智光秀の連歌○文明之母の評判 ●彙報 數件

●但し此中文藝欄內に掲載したる歌仙藤原爲兼卿の阿彌陀佛の歌は上からも下からも縱からも横からも自由自在ふ讀み得べき稀有の名歌にして苟も文學ふ志篤き者は一讀し置かざるべからず

○第四號よりは毎號「越路ぬ雪」とㄧふ面白き小說を十頁以上附錄と乙し附加すべ志

發行所 東京深川區諸町十三番地 生文社

●改良速記法 自宅獨修生募集ス學資一ケ月卅錢●郵券貳錢投セハ規則速呈●別ニ速成科ヲ設ク

東京本鄉元町壹丁目三番地 大東速記學協會

延壽 屠蘇賣出シ廣告

これハ弊舗の秘法にして至極体裁がよろしく そしてかほりがよくてその上價は廉ですからどをぞ付手に皆さま花の雲花の雪もいつしよに澤山お歳暮のお使ひものや來春の年玉や福引にお求め下さい。

十二月 日

發許藥舗 花の雲本舗 神田南神保町四番地 おきなや

○婦人教育雜誌 第七號十一月二十一日發行定價一冊五錢全國一般無遞送料

目次◎社說○本誌改良ニ付一言ス◎論說○婦人教育會諸孃ノ一讀ヲ煩ス（香川葆晃）○女服論（吉岡哲太郎）◎學藝○源氏物語乙女卷講義（深井仁子）◎保育◎家政◎史傳◎文苑◎叢話○歐州上流近世交際法◎小說○三才女（渚廼舍ろもめ）◎雜報◎上毛婦人教育會紀事◎社告◎廣告

今回發行所ヲ東京ニ移轉シ紙面ニ大改良を加候間倍す御愛讀を乞ふ

發行所 東京本鄉區眞砂町一番地 婦人教育雜誌社

大取次所 上野國前橋南曲輪町 上毛婦人敎育會本部

傳授廣告

世界一大發明 健忘（モノワスレ）ヲ即治シ記臆（オホヘ）ヲ聰明ナラシムル秘術

右傳習望ノ人ハ郵券貳錢ヲ送附スレハ方法細則速ニ送呈ス

薩摩揖宿病院 院長 西牟田

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

（遞信省認可）

いらつめ第十八號

いらつめ第十六號目次

家政。妻らしい妻。安直で美衣美食を得る秘傳。女生徒衣服粧飾。細君虎之巻。レモンの效用。
小說。空行く月(第七回第八回)(美妙齋)
講義。用器畫法第八回。
雜纂。露國育兒の奇法。婦女のいましめ
近事批評。洋服案討議。
近刊批評。文覺上人勸進帳‖新婦人‖君子と淑女。
流行。薄紅色の服‖帶地‖袷地‖袖口へ丁子龍腦麝香を縫込む事‖銀製御所櫻の簪‖つかみざし。
化粧。歯の色の黄色なのを除く法‖爪をうるはしくする法‖髪垢を去る法。
文藝美術。病後の吟(美妙齋)柳櫻都錦繡(立花屋かをる)
寄書。洋服に付きて(久平老人)
通信。もみぢ様へ‖燒餅を燒くといふ事○○紫園令孃へ‖ハンケチで會話する法○高木つや子様へ‖黄色になつたフランネルを洗ふ法○大島令孃へ‖皺のよらぬ法○岡田とり子様へ‖日本字モノグラム○水引の結び様○熨斗の事○夜の到來物○江崎様‖御辭儀の仕様○はな子様へ‖しつけの事○一條令孃へ‖白山羊の手袋○園子様へ‖臉燒を治す法○絹子様へ‖小豆を早く煮る法○松魚の虫を防ぐ法○文子孃へ‖蕈類の毒を試す法‖松蕈の貯へ方○山本氏へ‖銅鍋の蠟を引く法○時子孃へ‖かすていらをふくらす法○ユデ卵を殼のまゝ切る法○
餘興。新作謎
月報。
通俗衛生學。

いらつめ第十七號目次

家政。衣服の好。細君虎の巻。頸綠の洗ひ方。產前の心得。

小說。空行く月第八回第九回(美妙齋作)
衛生。日本風女學校用改良案‖衣服論(醫學士竹中成憲氏)
流行。此頃の女生徒の衣服の着様‖着物に半衿を掛けぬ新流行‖上着‖下着‖被布‖羽織‖襦袢袖口‖羽織の掛金及紐‖うこん香の簪及大緒薔薇の簪‖插或ハ千鳥のかんざし‖爪紅の風‖不斷着‖頭巾‖淑女の手ぶくろ‖肩掛。
講義。用器畫稽古の仕方。
文藝美術。聽音法(上眞行氏)柳櫻都錦繡(立花屋かをる作)
寄書。如何に女子を教育すべきか‖母親の述懷。
批評。新文學誌‖文明の花‖晃山記遊‖情‖都の花‖小說萃錦さこがね‖女學雜誌の舞踏論。
通信問答。簿記學についての問答‖顔の色を白くする法及毛生藥の事‖葱辣韮などの後口の臭きを直す法‖カバンの汚を洗ふ法‖留をよくする法‖白地の着物ゑ墨のつきたるを落す法‖めで度かしくの解‖唐縮緬をフランネルに似する法‖髪の縮きを濶くする法‖肥滿を防ぐ法‖雨中吟未來記‖三鏡‖色黑き肌を治す法‖香水の直段。疑問‖熨斗の濫觴。
論說。女子職業の天思(中川重麗氏)
餘興。新作謎(懸賞 金港堂出版の小說)
月報。

○いらつめ代價一冊金八錢六冊(半年分)金四十五錢十二冊(壹ケ年分)金八十錢府外每號郵稅壹錢宛申受○每月十五日發兌雜誌代ハ前金ニアラサレハ御送附不申候金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラハ拂渡郵便局トアル所ニ神田郵便局ト御記入ノ事幷ニ受取人氏名トアル所ニ神田區駿河臺南甲賀町八番地成美社ト渉記入ノ事
○廣告料一行五號文字二十七字詰 金八錢○十一行以上金七錢○二十一行以上金六錢 但前金ノ事

發行兼編輯人 山田武太郎　印刷人 佐野忠吉

發行所 東京神田區駿河臺南甲賀町八番地 成美社

（麴町區平河町文旋舍活版部印刷）

以良都女　第二巻　明治二一年

発行者　船橋　治

発行所　不二出版株式会社

東京都文京区本郷三丁目一六番六号

電話〇三(八一二)四四三三

振替　東京六―九四〇八四

印刷所　(有)東光

製本所　青木製本所

八三年一月二五日／復刻版発行

©1983

乱丁落丁はお取り替えいたします

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 879

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 879

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 879

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1762
I75+
no.7-18
1888

ASIA

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY